

高等学校における教科指導の充実

外国語科（英語）

外国語科（英語）における指導事例

～指導と評価の一体化を目指して～

栃木県総合教育センター

平成27年3月

ま え が き

現代を生きる私たちは、政治・経済・文化・情報・科学・技術など様々な面において状況が絶えず変化する社会の中にいます。今後も、少子化・高齢化の急速な進行や、グローバル化にともなう国際競争の激化、地球規模での環境の変化等が予想されるとともに、世界的に知識基盤社会へと移行しつつあり、新しい知識・情報や的確な判断力、コミュニケーション能力等を身に付けることの重要性がますます増大していくものと思われます。

そのような中で「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」をもち、あわせて「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」や「たくましく生きるための健康や体力」を備えた人間を育成すること、つまり「生きる力」をもつように子どもたちを教育することが求められています。

高等学校においては、平成25年度入学生より新しい学習指導要領が全面実施となっています。この新学習指導要領では、「生きる力」を育むためには、「基礎的・基本的な知識・技能」の習得と、それらを活用して課題を解決するために必要な「思考力、判断力、表現力等」の育成をバランスよく行うことが重要であるとしています。また、「主体的に学習に取り組む態度」の育成も大切です。これらのいわゆる学力の三要素をバランスよく育成するためには、指導を計画的に行うとともに、PDCAサイクルに基づく工夫改善を進めていく必要があります。そのためには、学習の評価についても、計画的に多角的な観点から生徒を評価するとともに、その評価を次の指導の改善につなげる「指導と評価の一体化」を図ることが求められています。

これらの求めに応じるためには、より一層の学習指導の工夫・改善が必要となります。栃木県総合教育センターでは、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。平成25・26年度は、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、指導と評価の一体化を図るための工夫改善についての調査研究に取り組み、今年度は、地理歴史・公民科、外国語（英語）科、農業科、工業科、商業科の各教科において実施しました。教科指導を充実させるために、本冊子を活用し、生徒の学力向上に向けた取組の成果を上げていただきたいと願っています。

最後になりますが、調査研究を進めるに当たり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成27年 3 月

栃木県総合教育センター所長
長 野 誠

目 次

I	本調査研究の背景	1
1	学習指導要領改訂の基本的な考え方	
2	学習評価の在り方	
II	外国語科（英語）における指導と評価について	7
1	外国語科（英語）における指導と評価	
2	指導と評価の一体化を図った実践事例	
III	実践事例	
	事例1「英語表現Ⅱ」における指導と評価の一体化を図った工夫	12
	事例2「英語Ⅱ」における指導と評価の一体化を図った工夫	29
	事例3「リーディング」における指導と評価の一体化を図った工夫	42
IV	おわりに	56

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

I 本調査研究の背景

今年度の「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」は、平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、「指導と評価の一体化」等の各教科に求められている課題解決を図るための教科指導の在り方を探ることに重点を置き、地理歴史・公民科、外国語科（英語）、農業科、工業科及び商業科で実施するものである。

各教科で調査研究した内容を次章以降に提示するに当たり、まず、平成21年告示の高等学校学習指導要領改訂の基本的な考え方及び学習評価の在り方について整理する。

1 学習指導要領改訂の基本的な考え方

(1) 教育基本法の改正から、学習指導要領の改訂までの流れ

ア 教育基本法の改正（平成18年）

「科学技術の進歩・情報化・国際化・少子高齢化・核家族化」「価値観の多様化」「社会全体の規範意識の低下」など、昨今の教育を取り巻く環境の変化を受けて、平成18年に教育基本法が約60年ぶりに改正された。

新しい教育基本法では、「人格の完成」や「個人の尊厳」など、これまでの教育基本法の普遍的な理念は大切にしつつ、時代の変化に即した内容を盛り込みながら、

- 知・徳・体の調和がとれ、生涯にわたって自己実現を目指す自立した人間
- 公共の精神を尊び、国家・社会の形成に主体的に参画する国民
- 我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人

の育成を目指している。

イ 学校教育法の改正（平成19年）

教育基本法の改正を受けて、学校教育法をはじめとする教育に関係する諸法令が改正された。平成19年に改正された学校教育法では、新たに「義務教育の目標」が規定された。また、小・中・高等学校等においては、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められた（第30条第2項、第49条、第62条等）。

ウ 中央教育審議会答申（平成20年）

新しく明確にされた教育の基本理念を受けて、平成20年1月に中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」が出された。この答申では、知識基盤社会への移行や、グローバル化による国際競争の激化等、大きく社会構造が変化する中で、ますます「生きる力」が重要であるとしている。

また「生きる力」を支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を重視するとともに、学力の重要な要素は「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の三つであるとした。

エ 高等学校学習指導要領改訂（平成21年）

以上の法改正及び答申を受けて、平成20年には小・中学校の、平成21年には高等学校・特別支援学校の学習指導要領が改訂された。小・中学校においてはそれぞれ平成23・24年度から一斉実施、高等学校においては原則として平成25年度入学生から年次進行で実施されている。なお、総合的な学習の時間や数学、理科など一部の教科等では先行実施されている。

(2) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

今回の学習指導要領の改訂は、平成20年1月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に基づいている。この答申の中では、学習指導要領改訂の基本的な考え方として、改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、

- ① 「生きる力」という理念の共有
- ② 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ③ 思考力・判断力・表現力等の育成
- ④ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑤ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑥ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

の6点を挙げており、その中でも、特に、②を基盤とした③、⑤及び⑥が重要としている。

これらをまとめると、

- ◇ 大きく変化する社会に生きる中で必要とされる「生きる力」を育むため、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和のとれた教育をすること **【生きる力】**
- ◇ 「確かな学力」を身に付けるためには、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と、それらを活用して「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」をバランスよく行うこと **【習得と活用】**
- ◇ 「学習意欲」を高め、家庭学習も含めた「学習習慣の確立」を図ること **【学習に取り組む態度】**

などが主なポイントとして挙げられる。

2 学習評価の在り方

平成22年3月に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下「報告」という。）がとりまとめられた。その中で、「学習評価の意義と学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性」について、次のように述べられている。

- 学習評価は、児童生徒が学習指導要領の示す目標に照らしてその実現状況を見ることが求められるものである。学習指導要領は、各学校において編成される教育課程の基準として、すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり、指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するものであるのに対し、学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものと言える。
- また、従前指導と評価の一体化が推進されてきたところであり、今後とも、各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である。

特に、「教育水準の維持向上を保障する」という観点で学習評価を見ることは重要であり、単に生徒の成績を付けるために学習評価があるのではないことに留意する必要がある。

(1) 学習評価の基本的な考え方

先ほど述べた「報告」を受けて、同年５月に、文部科学省初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（以下「改善通知」という。）が出された。

「改善通知」では、「学習評価の改善に関する基本的な考え方」を次のように述べている。

- 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要であること。その上で、新しい学習指導要領の下における学習評価の改善を図っていくためには以下の基本的な考え方に沿って学習評価を行うことが必要であること。
- 【1】 きめの細かな指導の充実や児童生徒一人一人の学習の確実な定着を図るため、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を評価する、目標に準拠した評価を引き続き着実に実施すること。
- 【2】 新しい学習指導要領の趣旨や改善事項等を学習評価において適切に反映すること。
- 【3】 学校や設置者の創意工夫を一層生かすこと。

また、「報告」においては、

- 学習状況を分析的に見る「評価の観点」については、成績付けのための評価だけでなく、指導の改善に生かす評価においても重要な役割。
- そのため、今回、学習指導要領等で定める学力の3つの要素に合わせ、評価の観点を整理することとし、概ね、
 - 【1】 基礎的・基本的な知識・技能は「知識・理解」「技能」において、
 - 【2】 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等は「思考・判断・表現」において、
 - 【3】 主体的に学習に取り組む態度は「関心・意欲・態度」において、それぞれ評価を行うことと整理。
- 各教科の評価の観点は上に示した観点を基本としつつ教科の特性に応じて設定。

としており、簡潔に言えば次の３点、

- ◇ 観点別学習状況の評価の実施
- ◇ 目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）の実施
- ◇ 指導と評価の一体化

の更なる充実が求められている。

なお、「報告」では、高等学校における学習評価の現状と課題として「（高等学校においては）小・中学校ほど十分な定着は見られない」と指摘し、高等学校においても、評価による指導の改善を図るとともに、評価を通じた教育の質の保証を図るため、観点別学習状況の評価を推進していくことが必要であるとしている。ただし、高等学校においては、各学校の生徒の特性、進路等が多様であることへの配慮も必要としている。

(2) 観点別評価

これまで述べてきたとおり、学力の三つの要素を適切に評価するために、原則として四つの観点で学習評価を行うことが求められている。

学力の三つの要素	学習評価の観点
○ 基礎的・基本的な知識・技能	「知識・理解」 「技能」
○ 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等	「思考・判断・表現」
○ 主体的に学習に取り組む態度	「関心・意欲・態度」

ただし、上の四つの観点を基本としつつ教科の特性に応じて「各教科の評価の観点」をそれぞれ設定している。

これまで、学校においては「ペーパーテストの点数による評価」が中心で、「知識・理解」への偏重があり、更にはいわゆる「詰め込み型の学習」につながる面もあった。また、経済協力開発機構（OECD）が行う「生徒の学習到達度調査（PISA）」などの国際調査の結果から、日本の児童生徒には「読解力」「表現力」「知識の活用能力」「学習意欲」などの面で課題があると指摘された。これらの反省から、小・中学校においては「思考力・判断力」等のペーパーテストには現れにくい学力を適切に評価するための取組がなされ、観点別評価が着実に実施されている。一方、高等学校においては、指導要録に「観点別学習状況の評価」を記載することとはされておらず、観点別評価が小・中学校に比べると定着していない状況にある。

高等学校においても、ペーパーテストだけでなく、日頃から観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、学習活動の特質、評価の観点、場面などに応じて、生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが大切である。

(3) 目標に準拠した評価

以前、小・中学校では児童生徒の成績を集団の中における相対的な位置（順位）により評価する「集団に準拠した評価」（いわゆる相対評価）が行われていた。

平成10年の学習指導要領改訂にともなって学習評価の在り方が見直され、現在のような児童生徒一人一人の学習状況を学習指導要領の定める目標に対する実現状況によって評価する「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）に改められた。右の図1、図2にそれぞれのイメージを示す。

「集団に準拠した評価」においては、「どのような集団においても学業成績の分布はほぼ同じになる」という考え方が根底にある。この考えを基にして上位から何％は「評定：5」のように、順位による評定を行うことになる。しかし、実際には集団によって分布に違いがあり、また児童生徒一人一人の達成度を適切に評価する必要から、「目標に準拠した評価」に改められた。

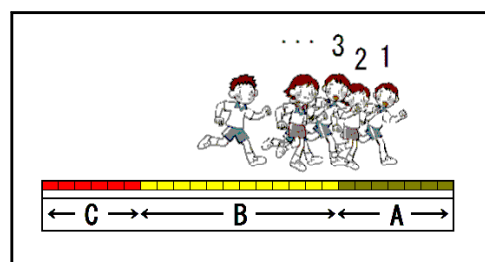


図1 集団に準拠した評価のイメージ

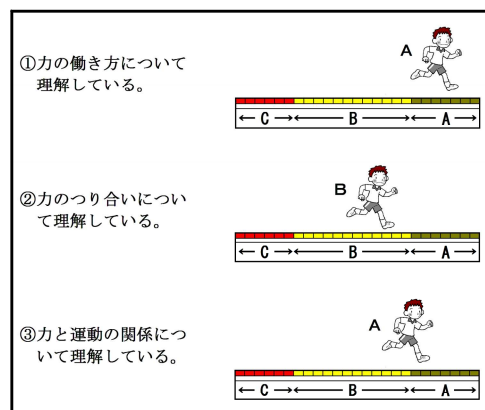


図2 目標に準拠した評価のイメージ

「目標に準拠した評価」においては、「児童生徒一人一人が、学習の目標をどの程度達成しているか」によって評価を行う。そのためには「学習の目標を達成した」とはどのような状況かを各教科の観点別に明確化しておく必要があり、その判断の拠り所とするものを**評価規準**という。評価規準は通常、学習の内容ごとに学習指導要領の定める学習の目標と照らし合わせて「おおむね満足できる状況」を示す。

例えば、理科の科目「物理基礎」の学習内容において、「イ 様々な力とその働き」のうちの「(イ) 力のつり合い」の目標は、(学習指導要領より) 次のように設定できる。

目 標： 物体に働く力のつり合いを理解する。

この目標が、「達成された状況」とはどういう状況であるかを観点別に具体的に示したものが評価規準であり、例えば、

「関心・意欲・態度」：○身の回りの物体における力のつり合いを考察しようとしている。

「思考・判断・表現」：○物体に働く力がつり合う条件について考察している。

○物体に働く力のつり合いから、未知の力を見いだしている。

「実験・観察の技能」：○力の三要素に留意して、力をベクトルの矢印で表している。

「知識・理解」：○力は、向きをもつベクトル量であることを理解している。

○複数の力について、向きを考えて合成している。

などとなる。これらの評価規準は、各学校において、生徒の実態等を考慮して学習指導計画とともに設定することになる。

なお、評価規準の語尾については、『～しているか。』（疑問形）や『～することができる。』（可能表現）などを用いる例が散見されるが、評価規準は「おおむね満足できる状況」を示すものであるから、原則として『～している。』などとするのが望ましい。ただし、「関心・意欲・態度」の観点で『～しようとしている。』という表現を用いたり、教科の特性によっては「思考・判断・表現」や「技能」の観点で『～できる。』という表現を用いたりすることもある。

授業時には、設定した評価規準に照らし合わせて、

A：「十分満足できる」 B：「おおむね満足できる」 C：「努力を要する」

のいずれになるかを判断する。その際に、判断の基準とするものを「評価基準」と言うことがある。例えば、「10問の評価問題中、8問以上を正解した場合をA、6～7問正解した場合をB」としたり、「物体に働く力がつり合う条件について考察していればB、物体の運動状態と関連づけて働く力のつり合いを考察している場合をA」としたりするなどの基準が考えられる。いずれの場合でもBに達しない状況をCとする。

ここで、「評価規準」と「評価基準」という二つの語を使い分けているので注意したい。これらの違いは、前ページの図2において次のように例えると分かりやすい。

評価規準（目標を達成した状況を明確化したもの）＝ものさしの種類

評価基準（評価を出す段階における判断の基準）＝ものさしの目盛

以上のように、各単元（題材）毎に「観点別学習状況の評価」を行い、最終的にはそれを評定へと総括する。

なお、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 ～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～」（国立教育政策研究所教育課程研究センター平成24年7月—「専門教科」については平成25年3月）には、各教科ごとの評価規準の設定例や総括の仕方等がまとめられているので、参考にとるとよい。

(4) 指導と評価の一体化

既に述べたように、学習評価の目的は、単に生徒の成績を付けるためにあるのではなく、教育の質を保证する役割がある。とりわけ、学習評価の結果から、個に応じた指導を行ったり、学習指導の在り方を見直したりすること、つまり「指導と評価の一体化」が求められている。

学習評価を単に学習指導の結果としてとらえるのではなく、評価を通じて指導の改善を行ったり、組織的な見直しをしたりするなど、指導と評価を一体的に行うことが重要である。そのためには、「成績を付けるための評価」だけでなく「指導に生かす評価」を行い、それを学習指導に係るPDCAサイクルに組み込むことが大切である。具体的には、

- ① 「指導計画」を立案する際に「評価計画」を立てる。
- ② その際に、評価の観点のバランスに留意する。
- ③ また、総括の資料とする評価（成績を付けるための評価）だけでなく、「指導に生かす評価」を盛り込むよう留意する。
- ④ 評価の結果から、指導上の成果や課題を検証し、次の指導に生かす。
- ⑤ 個々の達成状況の把握から、達成度が不十分な生徒に対して指導の手立てを講じる。

などがポイントとなる。

これらの取組により、次のようなメリットがあると考えられる。

- あらかじめ学習内容の指導計画とともに評価の観点を生徒に示すことにより、生徒にポイントを押さえた学習をさせるとともに、学習意欲の向上を図ることができる。
- 指導計画とともに評価の観点を明確にすることにより、特定の観点到偏ることなく、バランスの取れた指導をすることができる。
- ペーパーテスト、ノート、レポート、発問等の様々な評価方法の中から、評価の目的・場面等に応じて適切なものを選択することができる。
- 個々の達成状況をこまめに確認することにより、きめ細かい指導をすることができる。
- 評価が計画的・客観的になり、信頼性が高まるとともに、教育水準の保障に寄与する。

ここに挙げたもののほかにも、「指導と評価の一体化」によって、様々な効果を期待することができる。以下では、各教科における指導と評価の一体化の在り方と、実践事例を紹介する。

Ⅱ 外国語科（英語）における指導と評価について

1 外国語科（英語）における指導と評価

(1) 外国語科の目標について

高等学校学習指導要領（平成21年改訂）で定めている外国語科の目標は以下のとおりである。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

外国語科の目標は、簡単に言うと「コミュニケーション能力を養うこと」であり、その目標達成のために行う行動は次の①～③の3つの部分からなる。そして、それぞれの目標の達成状況を評価する観点を以下に示す。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
→「言語や文化についての知識・理解」
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
→「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」
- ③ 外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。
→「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」

※ 外国語科における特性に応じた評価の観点及びその趣旨

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えている。 ※外国語科の特性により、第3章の実践事例では「～できる。」という表現を用いる。	外国語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解している。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

(2) 外国語科における観点別評価について

生徒の学習状況を目標に準拠して評価する際には、それぞれの評価規準に照らし合わせて、「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）のいずれの状況にあるのかを、次のような観点から判断することになる。

ア 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」

- ・コミュニケーションに取り組む様子やコミュニケーションを継続させようとする努力の様子を捉えて評価する。

- ・授業中の挙手や発言の回数といった表面的な状況のみに着目するのではなく、言語活動への取組や継続の仕方など、実際に指導した内容に対して生徒が努力して取り組んでいるかどうかについて、活動の様子を判断材料として評価する。

イ 「外国語表現の能力」

- ・自分が伝えたい情報や考えなどを、場面や状況に応じて適切に相手に伝えることができるかどうかについて評価する。
- ・「言語や文化についての知識・理解」に分類される音声、語彙、文法、語法、言語の背景にある文化などに係る知識を活用して、実際に話したり書いたりすることにより、英語で表現することのできる能力を評価する。

ウ 「外国語理解の能力」

- ・話し手や書き手の伝えたいことを、場面や状況を踏まえて的確に把握することができるかどうかについて評価する。
- ・「言語や文化についての知識・理解」に分類される音声、語彙、文法、語法、言語の背景にある文化などに係る知識を活用して、実際に聞いたり読んだりした英語を理解することのできる能力を評価する。

エ 「言語や文化についての知識・理解」

- ・知識や理解がコミュニケーションを目的として言語を運用する支えとなっているかについて評価する。
- ・「言語」についての知識・理解は、発音、語彙、文法、語法や文章構成など、英語の仕組みやその使い方についての知識の有無を評価する。
- ・「文化」についての知識・理解は、英語を理解したり英語で表現したりするに当たって、理解をしていないとコミュニケーションに支障をきたすような文化的背景についての知識・理解を評価する。

学習指導要領の改訂を受けて、「聞くこと」や「読むこと」など理解の能力に関わる受信型の指導ばかりではなく、学んで得た知識を活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することができる表現の能力の育成が強く求められている。4技能を総合的に育成する指導を通じて、生徒が4技能を統合的に活用できるよう、言語活動を充実させることが必要となる。また、文法指導を言語活動と一体化して行ったり、授業は英語で行うことを基本としたりすることの趣旨は、受信だけではなく発信にも活用できる知識や技能を生徒が得られるよう、指導をより一層充実するということにある。これらのことを踏まえ、各学校では4観点ごとの評価規準の設定や指導及び評価を行う必要がある。

(3) 授業のデザインについて

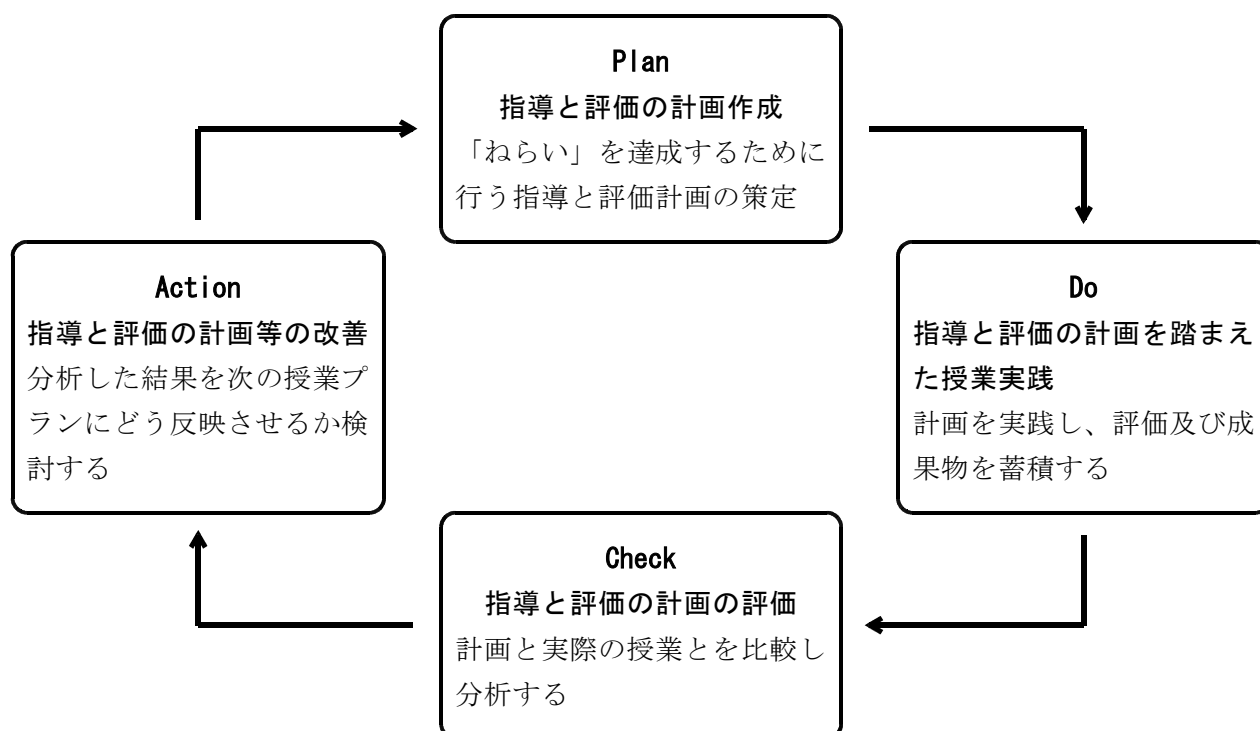
前に述べた4観点における評価を設定し、実際に授業を実践する際に重要となるのが「ねらい」を定めることである。そして、その「ねらい」を達成するべく授業内容をデザインする。その際には、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に育成するように心がけることが肝心である。授業中の活動を通じて、生徒が4技能を総合的に活用し、コミュニケ

ーション能力を育成できるよう工夫することが求められている。つまり、言語活動が充実するように教師が工夫する必要がある。したがって、評価規準の設定においては、指導の結果として4技能に関わる内容がどの程度身に付いたかを評価できるようにする。具体的には、

- ① 外国語科として3年間で育成する生徒の能力＝「CAN-DOリスト」の形で表記した学習到達目標を設定
- ② 各科目で、どの時期に、どの部分を育成するか検討
- ③ それに沿って年間計画・単元計画を作成
- ④ 授業の指導案を作成

という流れになる。

また、「ねらい」を達成する授業を実践するためには、評価計画を踏まえた指導があり、評価結果を反映して次の指導を考察していくというサイクルを構築することが重要である。



(4) 「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標について

観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」については、「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標と関連があるので、その設定に関するフローチャートを参考として記載しておく。

ア 「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定の目的

学習指導要領に基づき、観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること。



イ 卒業時の学習到達目標設定

生徒の学習の状況や地域の実態等を踏まえた上で、学習指導要領上の目標等に基づいて卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定。

⇕ ※ イ及びウ・エ・オが相互に対応したものとなるよう調整

ウ 学年ごとの学習到達目標設定

卒業時の学習到達目標を達成するための学年ごとの目標を、「CAN-DOリスト」の形で設定。



エ 年間の指導と評価の計画への反映

- ・「CAN-DOリスト」の形で設定した学年ごとの学習到達目標を年間指導計画等に位置づける。
- ・各単元における目標、主な学習活動、評価方法等を計画。



オ 単元ごとの指導と評価の計画への反映

- ・各学校で実際に行われる学習活動を基に、各単元の目標及び評価規準を設定。
- ・教科書を中心に、単元の目標を達成するのに適した教材を活用した各時の学習指導を計画。
- ・目標の達成状況を把握するための具体的な評価を計画し、単元計画に位置づける。



カ 授業と評価

- ・言語を用いて何ができるようになるかという観点から計画した授業を実施。
- ・単元の目標や評価規準を意識して授業を実施することが重要。
- ・観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、評価の計画に従い、学習活動の特質等に応じて、生徒の学習状況を的確に評価できる方法で実施。評価方法例：面接、エッセー、スピーチ等のパフォーマンス評価等
- ・単元等の区切りの中で適切に設定した時期において評価。さらに学期や学年といった単位で学習の実現状況をまとめる。
- ・観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点を併せて評価する。



キ 達成状況の把握

各単元の目標や学年ごとの学習到達目標の達成状況を把握し、指導や評価の改善に生かす。必要に応じて教科書の採択に生かす。



ク 学習到達目標の見直し

設定した卒業時及び学年ごとの学習到達目標が適切であったかどうかを検討し、必要に応じて見直す。



イ 卒業時の学習到達目標設定に戻る。

2 指導と評価の一体化を図った実践事例

本調査研究では、新課程における科目「英語表現Ⅱ」と、旧課程における科目「英語Ⅱ」「リーディング」において、現行の学習指導要領に基づいて、様々な言語活動を通じて「指導と評価の一体化」を目指した授業実践を行った。

なお、高等学校学習指導要領解説（外国語）の第4章の第2節に、「教材については、外国語を通じてコミュニケーション能力を総合的に育成するため、各科目の目標に応じ、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、その外国語を日常使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学等に関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるもの」とある。グローバル化が進む中、国際社会に生きる日本人としての自覚を育むため、各事例で、各学校で使用する教科書の内容以外にも、日本の文学、歴史、風俗習慣等に関する題材を取り上げ、言語活動の材料とした。各事例の概要は以下のとおりである。

事例1 「英語表現Ⅱ」における指導と評価の一体化を図った工夫

Lesson 3「夏目漱石の『こころ』」、Lesson 4「小笠原の自然を守ろう」と「修学旅行の平和学習に関連した和文英訳活動」の3つの単元を取り上げ、自分自身の考えや将来の夢を適切に相手に伝えるために表現を工夫することをねらいとした。評価に関しては、ペアワーク、グループワークでの活動の様子や、ワークシートの記述内容から評価を行った。また、生徒自身に自己評価を行わせ、評価の参考とするとともに、学習意欲を向上させられるよう工夫した。

事例2 「英語Ⅱ」における指導と評価の一体化を図った工夫

Lesson 7 WHAT DO WE NEED TO CHANGE THE WORLD? — BONO'S CHALLENGE、Lesson 8 LIVING WITH ANIMALS by Konrad Z. Lorenz の2つの単元を取り上げ、主に絵を用いて内容理解を図る活動等を通して、コミュニケーション能力を総合的に育成することをねらいとした。評価に関しては、ペアワーク、グループワークでの活動の様子や、ワークシートの記述内容から評価を行った。

事例3 「リーディング」における指導と評価の一体化を図った工夫

Lesson 9 Part 1 Black Tea and Green Tea、Part 2 Squid Ink and Octopus Ink の単元を取り上げ、オーラルイントロダクションやリテリング活動等を工夫して、生徒が英語を使うことを通じて英文の読解・理解を深めることをねらいとした。評価に関しては、ペアワークや教師とのやりとりの様子や、ワークシートの記述内容から評価を行った。

<引用・参考文献>

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』（平成22年5月）

国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校外国語】』（平成24年7月）

文部科学省『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』（平成25年3月）

Ⅲ 実践事例

事例 1 「英語表現Ⅱ」における指導と評価の一体化を図った工夫

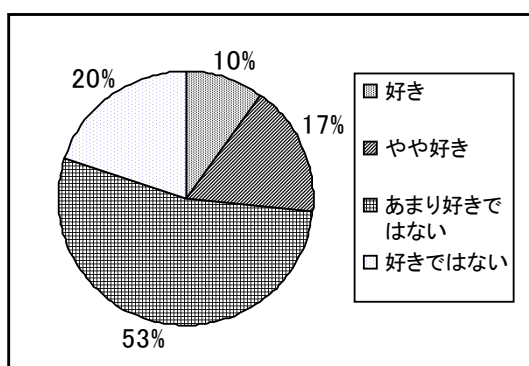
1 生徒の実態把握及び課題の設定 ～事前アンケート結果から～

(1) 事前アンケート（6月に実施）

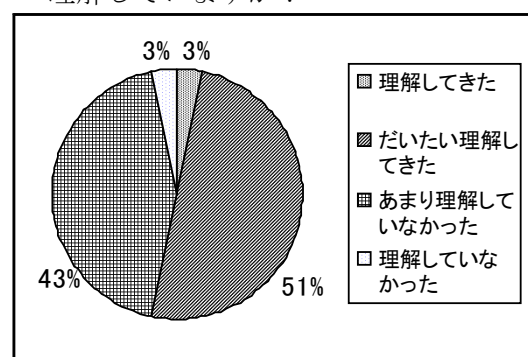
英語学習に対する意識を調査するために、事前にアンケートを実施した。今回のアンケートの対象は研究協力校の第2学年30名で、「英語表現Ⅱ」を2単位履修している。

ア アンケート結果

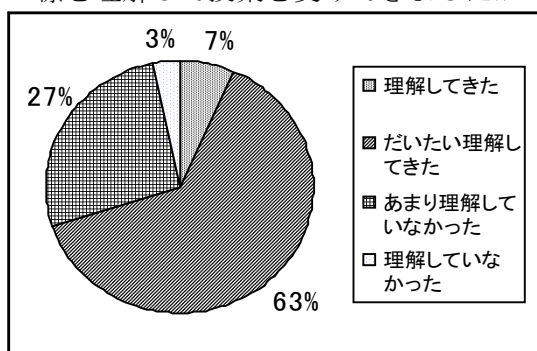
1 あなたは英語が好きですか？



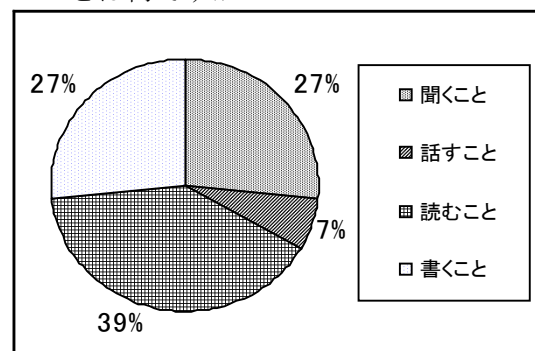
2 あなたは4月から今まで、授業の内容を理解していますか？



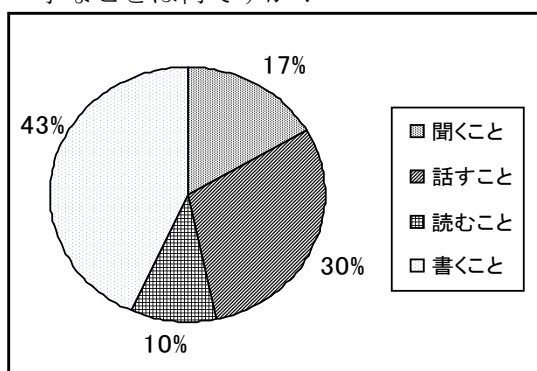
3 あなたはこれまで、その日の授業の目標を理解して授業を受けてきましたか？



4 あなたは英語の4技能の中で、最も得意なことは何ですか？



5 あなたは英語の4技能の中で、最も苦手なことは何ですか？



(2) アンケートから見えた課題とその改善方策

対象クラスの生徒は、英語の学習に対する意識が比較的高く、授業態度は良好である。しかし、質問1では、73%の生徒が英語を「好きではない」「あまり好きではない」と答えており、普段の様子からも、中には英語の学習習慣が確立していない生徒も多く見受けられる。特に予習に関してはほとんどの生徒が行っていない。週末課題や宿題の形で生徒たちに英作文を課しても、書いてこない生徒が数名いるのが実情である。授業中も、教師が板書したことをただ写すだけになってしまうことが多い。これらのことから、問題を前もって解いてきて授業で解説を受ける、という従来の「予習→授業」の形式から、事前準備プリントを自宅で解き、それを土台として授業中に問題に取り組んだり、英作文を書いたりする時間を多く確保する形式に変更し、自宅での学習では復習を主に行うように変更した。

また、質問3の「授業の目標を理解して授業を受けてきたか」に対する答えとして、3分の1の生徒が「あまり理解していない」「理解していない」と回答している。また、分野ごとに見てみると、outputに必要な「書くこと」「話すこと」の技能が苦手であるとする生徒が多い。実際、定期テスト等における英作文の分野では消極的な回答も多い。

以上を考慮して、今回の調査研究の第一の目標として、生徒の「書くこと」「話すこと」への苦手意識を払拭するために、問題演習だけではなく、生徒が興味をもって授業に参加できるようなテーマの活動を設定する。生徒にとって身近で書きやすい題材を用いたコミュニケーション活動や英作文活動を取り入れることにより、生徒が前向きに活動に取り組むきっかけを提供できるようにし、「話すこと」「書くこと」に対して生徒に自信をもたせる。

第二の目標としては、授業や活動を行う前に、この授業や活動の目標は何なのかを明確に示すことで、生徒に活動の目的や授業の目標を理解させる。これらの目標の達成状況を測る適切な評価規準の作成と評価方法を検討し、授業の改善に役立てる。

2 事例実践（1）

(1) 本事例で扱う単元

ア 単元名：Lesson 3 夏目漱石の『ころ』

使用教科書：CROWN English Expression II（三省堂）

イ 単元の目標：『ころ』の冒頭部分を読み、原因・理由、目的、結果を表す表現を理解する。

また、自分の好きな作家等の経歴や代表作等について、聞き手に興味をもたせるように口頭で伝えたり、読み手に伝わるように書いたりすることができる。

ウ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
A 既知の語句や表現を用いるなどして情報や考えを伝えようとしている。	B1自分の考えや意見をメモにまとめ、そのメモを基にペアで話し合うことができる。 B2原因・理由を表す表現を用いて、相手を納得させる英文を書くことができる。	C 説明文を読み、特に重要な事項等を捉えることを通じ、全体の要旨を理解することができる。	D 発音、話し方、アイコンタクトなど、スピーチを行う際に必要となる表現や方法についての知識を身に付けている。

エ 指導計画

時間	指導内容	評価基準との関わり	評価方法
1	話題の導入、新出語句・表現の確認、Oral Introduction、モデル文に関するQ&A、ディクテーション	A、C	観察、ワークシート
2	新出語句・表現の確認、問題演習、解説	C	観察、ワークシート、自己評価
3	メモに基づいたQ&A（実践1） 英作文活動（実践2）	B1 B2	観察、ワークシート、自己評価
4	英作文に基づいたスピーチ活動（実践3）	D	観察、ワークシート、ピアフィードバック

(2) 実践1 メモに基づいたQ&A

ア 活動内容

生徒自身が好きな作家や歌手等に関する基本的な情報をメモにまとめ、それを基にして簡単な質問に英語で答えることができる。

イ 指導手順

- (7) 自宅学習にて、自分の好きな作家に関しての基本的な情報をメモにまとめさせる。
- (イ) Q&Aの活動で質問をする際に使用する表現を口頭で練習させる。
- (ウ) メモに基づきペア同士でQ&Aを行い、口頭で対話を行わせる。

ウ 留意点

- (7) 活動に入る前に、質問する際に必要な表現を口頭で十分練習させる。
- (イ) Q&Aの際には、できるだけメモを見ずに会話するように指導しておく。

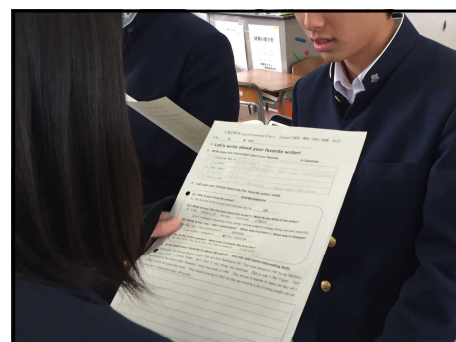


図1 授業中の様子

エ 評価

本実践では、生徒の活動の様子を観察することで評価基準B1（外国語表現の能力）について評価を行った。

評価基準B1：自分の考えや意見をメモにまとめ、そのメモを基にペアで話し合うことができる。

↓（生徒の様子）

観察の結果、1度目のQ&Aでは質問に対して単にメモを読み上げている生徒が多く、質問する側の生徒もプリントに載せておいた表現を読んでしまう者も多かった。そこで2度目のQ&Aでは、できるだけメモを見ないで行うように指示した。

↓（評価）

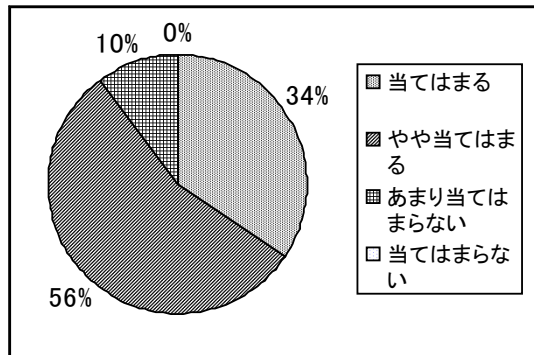
できるだけメモを見ないで、体をきちんと相手の方に向けながら、辞書を使わずにその場で英語を用いて話そうと努力している生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、用意してあったQ&Aが終了した後、その場で考えた質問をお互いに尋ね合い、メモ

以外の意見も交えながら会話を継続させようとしていた生徒については「十分満足できる」状況（A）と判断した。なお、メモを読み上げている生徒については「努力を要する」状況（C）と判断し、授業中の机間指導においてできるだけメモを見ないで話すように個別で指導した。

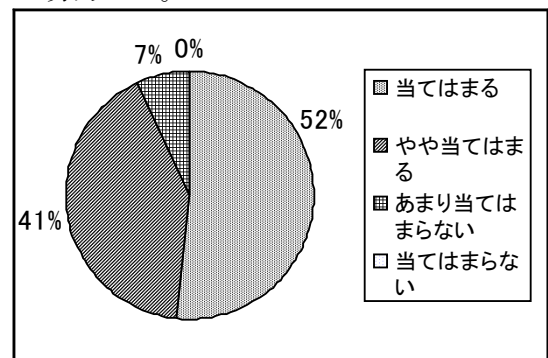
オ 自己評価結果

本実践においては、活動後に、以下の項目について生徒自身に自己評価を行わせた。

1 質問にきちんと答えられた。



2 自分の言葉を使って会話を続けようと努力した。



3 メモを見ないで話すことができた。

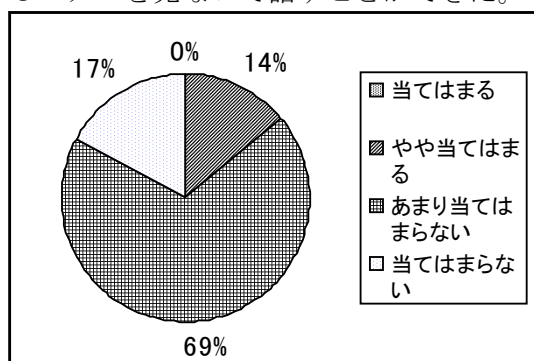


図2 授業中の様子

生徒による自己評価で、質問2「自分の言葉を使って会話を続けようと努力した」に関しては93%の生徒が「当てはまる」「やや当てはまる」と回答し、生徒が興味をもっている話題に関して自分の意見や考えを話す活動では、生徒の意欲がより高まり、自ら工夫することができることが分かった。しかし、質問3「メモを見ないで話すことができた」に関しては、計86%の生徒が「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と回答した。

今回の活動では、質問事項に関して表現の説明や練習しか行うことができず、質問に答える際に必要な表現の練習をする時間を設けることができなかった。今回の実践を踏まえて、今後同様の活動を行う際には、各自で練習する時間を十分にとってから活動に臨ませるとともに、クラス内を自由に歩き回ってより多くの生徒と繰り返しQ&Aを行わせ、最初からメモを見ないで会話できるように工夫する。

(3) 実践2 英作文活動

ア 活動内容

英語で自分の好きな作家や歌手等を他者に紹介する文章を書くことができる。

イ 指導手順

- (ア) J.K. ローリングを紹介する日本語を英語に直す活動を行い、そのメモ<資料1>を参考にさせる。

<資料1> 生徒が書いたメモ

①導入: The Harry Potter series was written by the British author, J.K. Rowling.
 ②ポイント1: She began to write ^{a novel} for the purpose of make some money to bring up her only daughter.
 ポイント2: As soon as the first book of the series was published in 1997, ~~that~~ ^{it} became a great hit. so that they are
 ポイント3: She ~~wrote~~ ^{she wrote} the series of seven books ~~was~~ related to each other ^{because she thought the plot was very important}.
 ③おまけ: That is why the author as well as the series became famous.

- (イ)ブレインストーミング<資料2>を <資料2> ブレインストーミングの例

を行い、好きな作家について書く内容を充実させる。

- (ウ) メモやブレインストーミングを基に、英作文を書かせる。<資料3>

- (エ) 生徒を数名指名し、クラスの前で発表させる。

Collaboration
 woman
 singer
 popular
 music
 composition
 Very clear voice
 write the lyrics
 Simizu Shota
 Kato Miliya

<資料3> 生徒が書いた英作文

My favorite band is Acid Black cherry. They are from Japan. They were formed in 2007 by Yasu, who was a singer of Jeanne d'Arc. Yasu's voice is very cool and emotional. That is why I like Acid Black cherry. Their masterpiece is the single called "SPELL MAGIC", and "Yes", which was made in 2007 and 2012. They are popular in Japan. They sell a million records in Japan. They are loved by one's teens ~ fortys teens. Sure, I love by Acid Black cherry.

ウ 留意点

- (ア)ブレインストーミングのやり方を実際に教師が黒板を使ってモデルを示す。
 (イ) 適宜辞書を利用し、語彙や表現を工夫させる。

エ 評価

この活動では、ワークシートを提出させ、その内容を取組状況の判断材料として、評価規準B2(外国語表現の能力)について評価を行った。また、

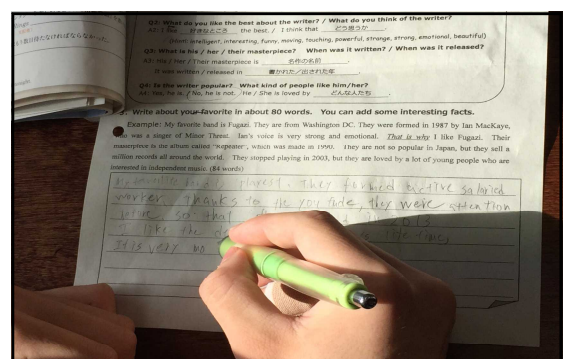


図3 授業中の様子

英作文活動終了後に生徒自身に自己評価を行わせ、評価の参考とした。

評価規準B2：原因・理由を表す表現を用いて、相手を納得させる英文を書くことができる。

↓（生徒の様子）

自己評価用紙を活動の前に配らなかったため、「相手を説得させるような英文を書く」という活動の目標を明確に伝えることができなかった。そのため、口頭での説明で終わってしまい、自己評価の結果からも「相手が好きになってもらえるように工夫できた」という項目で34%の生徒が低い評価をした。一方で、66%の生徒が「工夫できた」と評価しており、生徒が実際に作成した英作文＜資料3＞から分かるように、生徒が自分の興味関心のある分野について英作文を書く活動では、創意工夫を凝らしながら積極的に取り組んでいた。

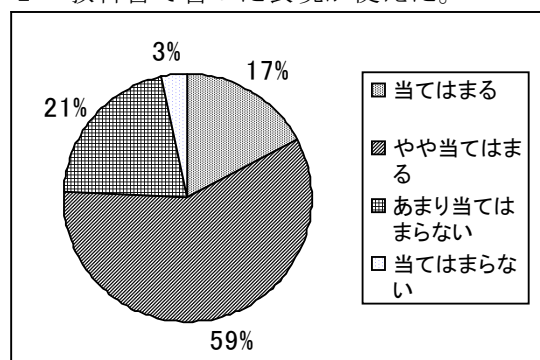
↓（評価）

指導手順(7)で参考となるメモ＜資料1＞を作成していたため、多くの生徒が原因・理由を表す表現として“*That is why …*.”を用いて英文を書くことができていた。原因・理由を表す表現を用いて英文を書いた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、原因・理由を表す表現に加えて、多様な表現を用いて「相手を納得させる」英文を工夫して書いた生徒については「十分満足できる」状況（A）と判断した。英文を書けなかった生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、提出させたワークシートを添削して対応した。

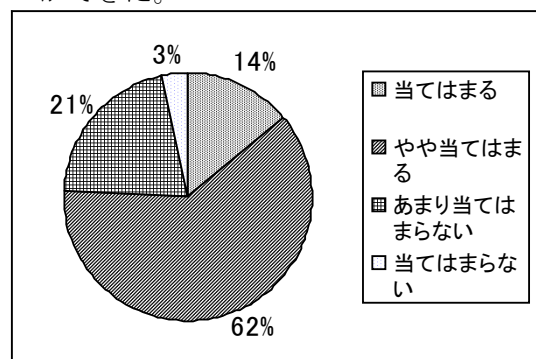
オ 自己評価結果

本実践においても、活動後に、以下の項目について生徒自身に自己評価を行わせた。

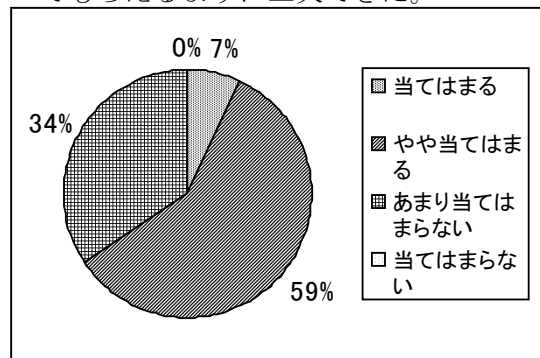
1 教科書で習った表現が使えた。



2 具体例や自分の意見をたくさん書くことができた。



3 自分の好きな作家等が相手に好きになってもらえるように工夫できた。



自由記述欄において、「あんなに長文を書けたのは初めて。」「自分なりにがんばって書くことができた。」「長文を書くのは難しかったけど、自分なりによく考えて書くことができたの

でよかった。」のような肯定的な意見を見ることができた。

今後の改善点としては、英作文を「誰に」「何のために」書くのかを生徒にはっきりと意識させるためにも、活動の目的や本時の目標を事前に提示するようにしたい。また、生徒のほぼ全員が「自分が伝えたいことをうまく書けなかった」という感想をもっていたので、活動の前には教科書で扱う言語材料以外に、自分の意見を述べるために必要になる表現等も練習する必要がある。次回は、段落の最後をこちらで指定するなどの工夫をしたい。一方で、英作文作成前にペア間で話し合わせたり、ブレインストーミングを行ったりしたことで、より内容のある英文を書くことができた。今後も継続して行っていきたい。

(4) 実践3 英作文に基づいたスピーチ活動

ア 活動内容

前回の授業で作成した英作文を用いて、グループ内で発表することができる。

イ 指導手順

- (7) 自宅学習にて、前回の英作文における文法の誤り等を訂正し、原稿を作成させる。
- (イ) 単語等の発音を辞書で確認した後、音読の練習を各自行わせる。
- (ウ) グループを作り、スピーチをさせる。
- (エ) 聞き手は「発音」「話し方」「アイコンタクト」の観点から発表に対する評価を行わせる。
- (オ) 内容に関する質疑応答を行わせる。
- (カ) 発表者に評価用紙＜資料4＞を配布する。

＜資料4＞ 生徒が作成した評価用紙

Speaker's name	Favorite band	Evaluation			Do you like it?
	one	発音	3	2	☒ ☐
	o'clock	大きさ	3	2	
		アイコンタクト	3	2	
☆Write some comment I know the band name. I like rock music. Please lend me CD! Do you have it?					

- (キ) 教師は提出された英作文＜資料5＞にコメントを加えて返却する。＜資料6＞

＜資料5＞ 生徒が作成した英作文（訂正前）

My favorite singer is Kyary Pamyu Pamyu. She (beings) emerged
in Harajuku. Her <u>face</u> is very cute. Her masterpiece is
the single called " <u>Edscism</u> ? Monster", which was made in
2012. she is so popular in <u>world</u> . <u>which is</u> London and Pari
etc. I like her wonder- and interesting music the best.
She <u>are</u> loved by a lot of young people.
I admire the singer Kyary Pamyu Pamyu.

<資料6> 生徒が作成した英作文（訂正後）

My favorite singer is Kyary Pamyu Pamyu. She was emerged in Harajuku. Her face is very cute. Her masterpiece is the single called "Fashion Monster", which was made in 2012. She is so popular in the world, especially London and Paris. I like her wonderful and interesting music the best. She is loved by a lot of young people.
I admire the singer Kyary Pamyu Pamyu.

ウ 留意点

- (7) 「発音」「話し方」「アイコンタクト」について注意しながらスピーチを行うことができるようにするため、以下の項目を黒板に板書する。

- 1 Pronounce words as clearly and smoothly as you can. 「発音」
- 2 Speak 1.5 times louder and slower than you do in normal conversations. 「話し方」
- 3 Make eye contact and try not to look at the script. 「アイコンタクト」

- (イ) 教師は事前に適切な「発音」、「話し方」、「アイコンタクト」のモデルを示す。

- (ウ) スピーチを聞く側はできるだけ内容をメモするように指導する。

- (エ) 評価をする際には、発表者に対して前向きなコメントを書いてあげるように指導する。

エ 評価

本実践では、評価規準D（言語や文化についての知識・理解）について、グループワークの様子の観察、ワークシートの内容、そして生徒によるピアフィードバックを参考にして評価を行った。

評価規準D：発音、話し方、アイコンタクトなど、スピーチを行う際に必要となる表現や方法についての知識を身に付けている。



（生徒の様子）

少人数のグループ内でのスピーチのため、生徒はクラス全体に発表する時よりも比較的緊張せずに行っていた。発音に関しては、発音の正しさではなく明瞭さと流暢さを評価の対象にしたが、生徒の中には依然として発音に不安をもっている生徒も多く、スピードや抑揚という面では課題が多く残った。しかし、英文をできるだけ見ないように努力する生徒や、相手に伝わるようにアクセントやピッチの工夫をする生徒も多く見受けられた。



（評価）

発音、話し方、アイコンタクトに気を付けてスピーチを行っていた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、発音、話し方、アイコンタクトに気を付けるとともに、顔を上げて英文を見ないでスピーチをすることができた者を「十分満足できる」状況（A）と判断した。原稿をただ読み上げる生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、そうした生徒については、グループでの発表の様子を観察しながら、随時個別に指導した。

今までのスピーチ発表では生徒の活動の様子を見取って評価を行っていたが、今回の活動

ではピアフィードバックの手法を用いた。生徒同士で評価を行うメリットは、生徒自身が評価者になることで、活動の目標を明確に理解することができると同時に、他の生徒の発表から学んだことを自分自身に反映できる点である。さらに、生徒と教師だけでなく、生徒と生徒同士で「実際の聞き手」に向かって話すことができるので、単なる原稿の音読ではなく、聞き手に伝わるよう工夫することができる。一方で、ピアフィードバックでは生徒同士が気を遣ってしまい、正しい評価を出せないというデメリットもある。

今回の評価では内容に関する項目は設けず、主に発話に重点を置いて評価を行った。生徒の多くがいずれの項目においても高い評価（３点）を付けていた。事前にもう少し教師が評価についての説明を十分に行い、教師がモデルとなって評価の仕方を練習すれば、伝えようとする内容に応じたスピーチ活動になったと考える。

3 事例実践（２）

(1) 本事例で扱う単元

ア 単元名：Lesson 4 小笠原の自然を守ろう

イ 単元の目標：自分の将来の夢を実現するために必要なことを、筋道を立てて内容を的確に書くことができる。

ウ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
A 既知の語句や表現を用いるなどして書き続けている。	B1忠告・義務、必要、提案・勧誘を表す表現を用いて、適切な英語を書くことができる。 B2序論・本論・結論といった構成要素に注意しながら、論理的でまとまりのある文章を書くことができる。		D1正しい知識や語法を用いて文章を構成する知識を身に付けている。 D2自分の将来の夢を実現するために必要な条件を伝える表現を理解している。

エ 指導計画

時間	指導内容	評価規準との関わり	評価方法
1	話題の導入、新出語句・表現の確認、ディクテーション	A、D1	観察、ワークシート
2	新出語句・表現の確認、問題演習（和文英訳）、解説	B1、D2	観察、ワークシート、自己評価
後日	「自分自身の将来の夢」についての英作文（実践４）	→ B2	定期テスト、評価表

(2) 実践4 「自分自身の将来の夢」についての英作文

ア 活動内容

前時の授業で行った「自然環境を守る自然保護官になるために必要な条件」を書いた英作文等を参考に、義務や必要を表す表現を用いて、生徒自身が「高校卒業後にやりたいこと」について、80語以上の英語で書くことができる。

※授業の活動を定期テストに反映させるため、この活動は定期テストに組み込んで実施した。

イ 指導手順

(7) 授業中に＜資料7＞を配布し、英作文のテーマ、評価の観点等を説明する。

＜資料7＞ 生徒に配布した資料

2学年英語表現Ⅱ 2学期期末テストについて【英作文編】

テーマ: 「あなた自身」について

【お知らせ・注意事項】

- ▶ 読み手（英語表現Ⅱの担当の先生）が興味を持つような内容になるよう工夫してください！
- ▶ 語数のカウントもしましょう。例) The ¹new ²edition ³has ⁴recently ⁵been ⁶published. → 7語
- ▶ 80語の目安は、教科書 p.44 や p.45 の文章（新大陸発見について）ぐらいです。
- ▶ 予め構想を練り、使いたい語(句)や表現を調べて書けるように練習しておきましょう。授業で学んだ表現も使えるよ！
- ▶ 文章の構成は、「導入／主題」「支持文」「まとめ文」で書いてみましょう。p.44,45 をよく読み、参考にしてください。支持文で、「なぜそうしたいのか」「きっかけ」「読み手に知ってほしい情報」など、モリモリ書いてください。読むのを楽しみにしています！

【評価について】

- ▶ 配点は20点です。
- ▶ 評価の観点は **①量 ②内容 ③文法・文構成 ④語の選択・スペリング** です。

① 量	・ 語の数 によって点数をつけます。0～16語（0～20％）は0点です。
② 内容	・ 特に、 支持文の中身 で判断します。 具体例 や エピソード 、 あなたの考え などをいっぱい書いてください！ただし、論理的な文章を心がけましょう。 ・ 友人と相談しながら構成を練るのは構いませんが、「全く同じ内容・文章」の場合は、両方で減点になります。 ・ 「同じ内容の繰り返し」になってしまっている場合も減点となります。
③ 文法・文構成	・ 基本的な文法 をチェックします。 例) ・ 時制や三人称単数現在形、語順（主語＋動詞＋…）など ・ 大文字／小文字、句読点、語と語の間のスペリング (every morning) ここに間が狭いのは減点
④ 語の選択・スペリング	・ 文脈に適した 単語の使い方 （惜しいけど使い方が違うものは減点）や、単語の綴りを見ます。

- (イ) 生徒にはテストまでにあらかじめ構想を練らせ、語句や表現を各自調べさせておく。
- (ウ) テストでは与えられた題と注意に従って80語以上の英文を書かせる。(辞書は使用不可)
- (エ) テスト終了後、教師は＜資料8＞の評価表に従って採点を行う。

＜資料8＞ 評価表

分野	評価の観点	Very Good!	Good!	Needs improvement	Unsatisfactory
量	80語以上の英文を書くことができる。	6 80語以上	4 50語以上	2 30語以上	0 16語以下
内容	指示文の中に、具体例やエピソード、自分の考えが詳しく述べられている。	8	6	4	0
文法	基本的な文法や語法を用いて書くことができる。	3	2	1	0
語彙	正しいつづりで適切な語句を用いることができる。	3	2	1	0
四連番号 名前				Total	

- (オ) 解答用紙には文法等の間違いを赤ペンで記入し、評価表と共に生徒に返却する。
- (カ) テスト返却後、主だった文法や語法の誤りを板書しながら説明する。

ウ 留意点

- (ア) 事前に、英文のテーマ（題に関してはテストで発表）や評価の観点等を載せた＜資料7＞を生徒に配布し、テストについて説明する。なお、問題用紙には以下の注意事項を掲載した。
- ＜注意事項＞
- ・ 解答用紙の書き出しに続けて書くこと。
 - ・ 文章の構成は「導入／主題」「支持」「まとめ」を意識して書くこと。
 - ・ 語数を数え、解答用紙に記入すること。
- (イ) テストの注意事項を示す際に、以前に学習した「パラグラフ・ライティングに向けて①」を見直し、「導入文・主題文」「支持文」「まとめ文」のそれぞれがどのような働きをするかを説明する。
- (ウ) 文法の誤り等はあまり気にせず、内容を充実させるように指示する。
- (エ) 英作文を採点する際には、＜資料8＞の評価表に従って採点を行う。生徒の解答からそれぞれの得点の例になるようなものを数点選び、採点者間で話し合いを行い、おおよその目安を設定する。
- (オ) 採点者間で差が出ないように、曖昧な点や疑問点がある時には適宜話し合いを行う。

エ 評価

この実践では、普段の授業での活動を定期テストに生かすために、定期テストに組み込んで評価表を基に評価規準B2（外国語表現の能力）について評価した。

評価規準B2：序論・本論・結論といった構成要素に注意しながら、論理的でまとまりのある文章を書くことができる。

↓ (生徒の様子)

このような形式での自由英作文のテストは生徒・教師共に初めての経験であったため、事前の打ち合わせと指導を入念に行った。授業中に行う自由英作文では、**実践2**で行ったようにある程度準備ができていた状態で行ってきたので、今回のテストに関しても試験一週間前にテーマを示し、必要な語彙や表現等を準備させておくことにした。そのため、生徒たちは自分自身で構想を練り、教科書や辞書等を用いて表現を熱心に調べていた。生徒たちは教科書で既に習った語句や表現を単に暗記するのではなく、それらの語彙や表現がもつ微妙な意味の違いや、使用する場面等に気を付けながら覚えようとしていた。

↓ (評価)

実際に生徒が書いた英文を読むと、文法的な誤りはやや見られるが、積極的に書き続けようとする意欲が見られた。中には普段の生徒の英作文からは見られないような語彙の多様性や文法の複雑さ、そして何よりも習ったことを使おうとする生徒も多く見受けられた。

論理的でまとまりのある文章を書くことに関して、パラグラフの構成に注意をしながら書いている生徒は「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。文法・語法等の誤りが少なく、多様な表現を用いて、適切に内容を伝えることができていた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。「努力を要する」状況（C）にある生徒について共通して言えることは、段落の締め括り方に困難を感じていたことであった。単に「自分のやりたいこと」を列挙することに終始してしまう生徒が数名おり、そうした生徒たちにはテスト後に放課後に補習をして個別に対応した。

4 事例実践（3）

(1) 本事例で扱う単元

ア 単元名：修学旅行の平和学習に関連した和文英訳活動

イ 単元の目標：グループワークを通して、日本語の詩を英語に訳すことができる。

ウ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
A 既知の語句や表現を用いるなどして書き続けている。	B 作者の意図や意思を意識しながら、適切な英語で詩を英訳することができる。	C 日本語の詩や俳句の英訳を読み、内容を理解することができる。	D 日本語の詩や俳句の英訳を読み、様々な訳があることを理解している。

エ 指導計画

時間	指導内容	評価規準との関わり	評価方法
1	日本語の詩や俳句の英訳の導入	C、D	観察、ワークシート
2	日本語の詩の導入（作者の意図・意思の確認）	A、B	観察、ワークシート
3	日本語の詩を英語に訳す活動（ 実践5 ）→	B	観察、ワークシート

(2) 実践5 日本語の詩を英語に訳す活動

ア 活動内容

修学旅行の平和学習と関連させ、平成26年6月23日に行われた沖縄全戦没者追悼式にて小学校3年生によって朗読された詩「空はつながっている」を、グループで協力しながら英語に訳すことができる。

※この活動は、愛知県立瀬戸北総合高等学校の箕浦麻里教諭によって行われた授業例を参考とした。

イ 指導手順

(7) 日本語の詩や俳句の英訳を読み、元になった作品について考えたり、同じ日本語の俳句であっても様々な訳があることを確認したりする。＜資料9＞

(イ) 「空はつながっている」を読み、誰がどんな相手に向けて詠んだのか推測させる。

＜資料10＞

(ウ) 詩を5つのパートに分割する。6人のグループを5つ作り、グループ内のペアで2～3行を英訳させる。

(エ) 英訳が終わったら、他のグループの英訳の語彙や文法等の訂正を行わせる。＜資料11＞

(オ) 教師は訂正後の各パートの英文を1つにまとめる。

(カ) 1つにまとめた英文を全員に配布し、各グループごとに改めて全体を読みながら文法や表現等を再度検討し、最終的な英文を完成させる。

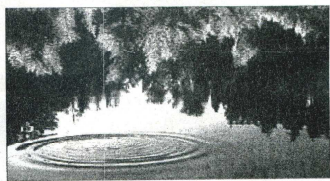
＜資料9＞ 生徒が作成したワークシート

＞ STEP 1 : 日本では有名な詩です。何の詩が答えよう！

- Old pond Frogs jumped in Sound of water
日本語: 古池や蛙飛びあつ水の音
- I bite into a persimmon
and a bell resounds —
Horyuji
日本語: かきくみは"金"の鳴るはソ法隆寺
- Ah! Matsushima! Matsushima.
日本語: 松島やああ松島や松島や
- I am alone, coughing
日本語: 咳をしそもーと
- Deep autumn, how does my neighbor live, I wonder?
日本語: 秋深い隣は何をする人ぞ

＞ STEP 2 : 同じ詩でも、人によって表し方は様々です。①～⑤を読んで、雰囲気をつかもう！

- An old pond A frog jumps in A splash of water.
- The old pond;
A frog jumps in —
The sound of the water.
- An old silent pond...
A frog jumps into the pond,
splash! Silence again.
- Listen! A frog
Jumping into the stillness
Of an ancient pond!
- Old pond...
a frog jumps in
water's sound.

＜資料10＞ 生徒が作成したワークシート

＞ STEP 3 : 次の日本語の詩を読み、以下の問いについて考えよう！

① この詩を書いたのは、どんな人だと思いますか？（年齢、性格、住んでいる場所など）

小学生が書いたもの（年齢）	
戦争がなくなると願っている（性格）	沖縄
東京（住んでいる場所）	
やさしい（性格）	

② 誰にむけて書かれたものだと思いますか？

戦争中（状況）	H26. 6.23
	沖縄全戦没者追悼式（69周年）

＞ STEP 4 : 英訳にチャレンジ！グループで協力し、この人の伝えたいことを英語で表してみよう！

- ✧ 書かれている状況や場面を想像してみよう！
- ✧ 辞書を活用しよう！
- ✧ 文の形にこだわり過ぎなくてOK ☺（STEP 1&2を思い出そう！）

<資料11> 生徒が書いた英文（訂正後）

But, fighting ^{there is} a war between country where under the sky. ^{distance}
Bombs be ^{are} dropped one after another and people
ran around to avoid it while crying out.
I can't go to school. I can't meet my ⁺ friends. Separately my
family.
A gray color of sad sky. Though the sky is connected
why?
How far peace? how far war? What should we do.
There isn't ^{to stop} war? was ^{make} the sky blue as far as the
eye could see.
1st check → [2] 班

ウ 留意点

- (7) 和文英訳活動に目的をもたせることで、書き手の意図や意思を意識しながら、適切な英語を使って書くように指導する。
- (イ) 単に英訳するだけでなく、「誰が」「なぜ」「誰に向けて」書いたのかを考え、生徒同士で協力して英語にするように指導する。
- (ウ) 単語は和英辞典で調べるだけでなく、英英辞典や英和辞典等から適切なものを用いさせる。

エ 評価

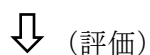
本実践では、グループワークでの活動の様子やワークシートへの取組状況を観察するとともに、生徒が作成した英訳を添削して、評価規準B（外国語表現の能力）について評価した。

評価規準B：作者の意図や意思を意識しながら、適切な英語で詩を英訳することができる。

↓（生徒の様子）

詩歌を英訳する際には、日本語の独特な表現やそれらがもつ微妙なニュアンスを適切に表す英語を探すのが非常に難しいが、事前活動として生徒たちに日本の有名な俳句が様々な形で訳されている例を提示することで、日本語にとらわれ過ぎずに柔軟な発想で考えようとする態度をもたせることができた。作者が詩を通してどのような気持ちや考えを伝えたいのかをよく考えるように指示すると、生徒は単語や熟語を念入りに調べ、英文を書いていた。また、生徒たちはこの活動を行う前に、実際に修学旅行で沖縄県に行き、沖縄戦の歴史やその悲惨さについて自分の目で実際に見てきたこともあり、取組状況は非常によかった。

本実践では、生徒同士がお互いの英文の誤りを訂正し、評価する活動を取り入れた。初めは各グループが作った英文を交換し文法や表現の訂正をさせたが、多くの生徒が「何が正しい表現なのか分からない」と言っていたため、瀬戸北総合高校によって書かれた英訳を参考にした。次に、それぞれのパートを合体させ、1つの英文にしたものを生徒に配布し、全体を通して読み、表現や文法等の変更点を指摘させた。やや難しい表現等は教師側からヒントを与え、生徒が作った元の表現をなるべく残しながら英文を完成させた。<資料12>



(評価)

作者の意図や意思を意識して、適切な英語で詩を英訳することができていた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。文法・語法等の誤りが少なく、多様な表現を用いて、適切に内容を伝えることができていた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。適切な英語で書けなかった生徒を「努力を要する状況（C）」と判断し、そうした生徒については、グループ内でお互い協力するように指示するとともに、その生徒のパートを個別に添削して対応した。

<資料12> 日本語の詩と最終的に完成した英訳（抜粋）

「空はつながっている」

ぼくのお気に入りの場所

My favorite place.

みどり色のしばふに ごろんとねころぶと
そよそよとふく風がぼくをやさしくなでる

When I am lying on the green lawn,
Soft blowing breeze is stroking me affectionately.

遠くでひびくアカショウビンの鳴き声
目の前ではお母さんやぎがやさしい目で
子やぎたちを見まもっている
青あおと広がるやさしい空

A cry of Ruddy Kingfisher is heard in the distance.
Mother goat is keeping eye on her young goat in front under the blue and gentle sky.

でも遠くの空の下では 今でもせんそうをして
いる国があるんだって
ばくだんが次つぎとおとされ なきさけび
にげまわる人たち

But, under the distant sky, there is a war fighting between countries.
Bombs are dropped one after another and people run around to avoid them while crying out.

学校にも行けない 友だちにも会えない
家族もばらばら

Children can't go to school. They can't meet friends. They are separated from their families.

はい色のかなしい空
空はつながっているのに
どうしてかな

The sky is gray with sadness, though the sky is connected.
Why?

どこまでが平和で どこからがせんそうなんだ
ろう どうしたら せんそうのない
どこまでも続く青い空になれるのかな

How far does peace exist, and how far does war exist? What should we do to stop wars and make the sky blue as far as eyes can see?

(以下省略)

資料提供：沖縄県平和祈念資料館

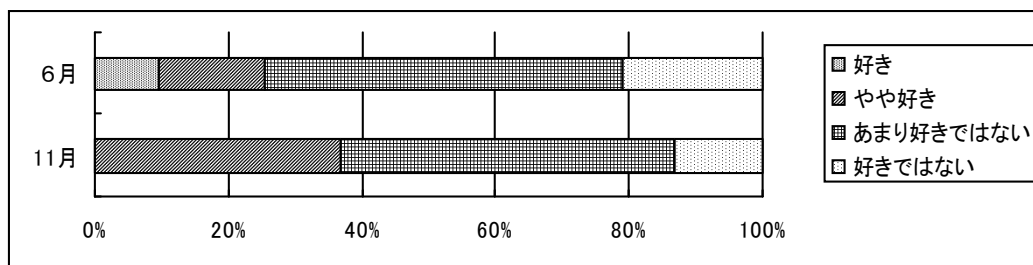
5 検証とまとめ

(1) 事後アンケート（11月に実施）による検証

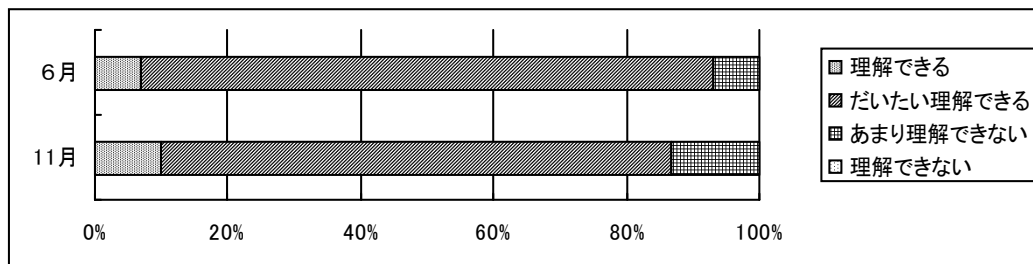
これまでの活動を通して生徒の意識がどのように変化したかを確認するために、事前アンケートと同じ内容で事後アンケートを実施した。

ア アンケート結果

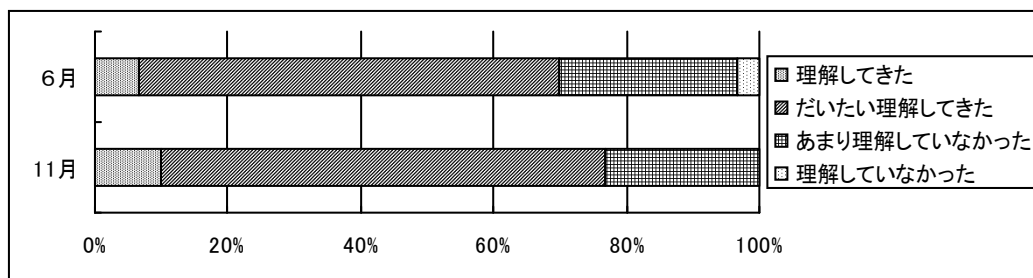
1 あなたは英語が好きですか？



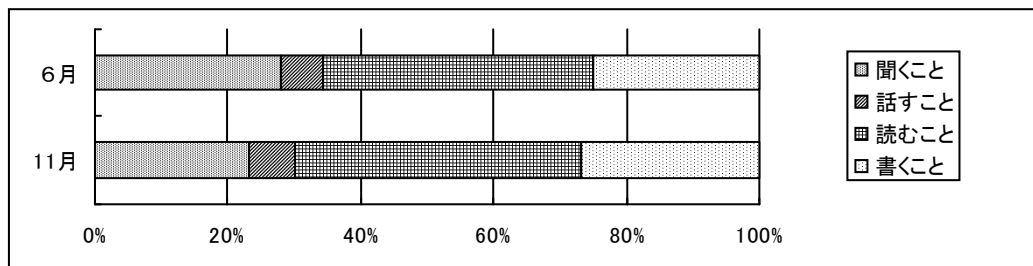
2 あなたは4月から今まで、授業の内容を理解していますか？



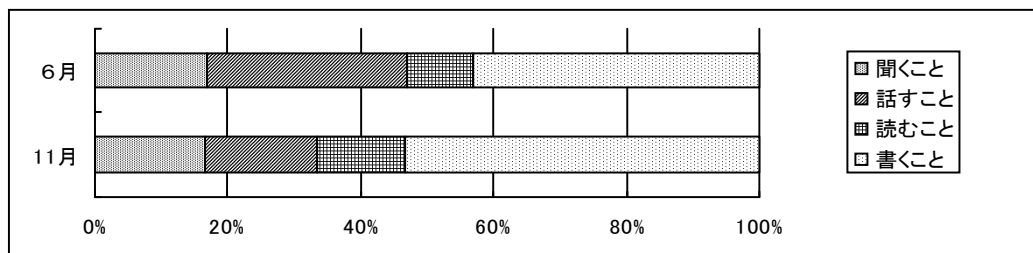
3 あなたはこれまで、その日の授業の目標を理解して授業を受けてきましたか？



4 あなたは英語の4技能の中で、最も得意なこと何ですか？



5 あなたは英語の4技能の中で、最も苦手なこと何ですか？



イ アンケート分析（6月と11月の比較）

質問1については、「あまり好きではない」から「やや好き」へと変わった生徒が若干名見

受けられたが、英語を「好き」と答えた生徒は減ってしまった。同様に、授業の理解度に関する質問2で、「あまり理解できない」がやや増加している。これらの原因としては、単元で学ぶべき文法や表現が複雑になったことや、表現活動で求められるライティング力がより高くなったことが挙げられる。これまでの教科書は文法体系ごとにまとめられた単元で構成されていたため、生徒にとっては取り組みやすかった。また、教科書の演習問題に関しても、英文の空欄補充や並べ替え、または短文の和文英訳が多かった。しかし、英語表現Ⅱにおいては、書かなければならない英文が長くなった上、まとまりのある論理的な英文を書く活動が多くなったため、以前までの知識を整理したり、それらを統合・応用したりするなど、より高いライティング力が要求されるようになった。そのため、生徒の中には難易度が上がったと考える生徒が多くなったと推測する。それは質問5の「書くこと」を苦手と答える生徒の増加にもつながる。

一方で、「話すこと」に関しては、苦手とする生徒がやや減っている。生徒が興味をもって取り組めるような話題を扱うことや、ペアやグループで対話を行う活動を増やしたことから、生徒は意欲をもって活動に参加することができた。今後は、即興で自分の考えを伝える活動を増やしていきたい。また、質問3の「授業の目標を理解しているか」に関しては、「理解してきた」と「だいたい理解してきた」という生徒がやや増加している。しかし、2割強の生徒が依然として「あまり理解していない」と回答しているため、授業の目標を事前に明示することに関しては、今後も継続していきたい。

(2) まとめ

今回の調査研究の第一目標である、「生徒が興味をもって参加できるコミュニケーション活動や英作文の工夫」に関しては、アンケートでは「書くこと」への苦手意識は若干増えてしまったが、おおむね達成できたと言える。教科書の言語材料は単元を追うごとに難しくなっていく中で、生徒は以前よりも前向きに取り組むようになり、英作文も期限を守って提出するようになった。

「書くこと」は得意とは言えないが、「書くこと」に対して抵抗感がなくなった生徒が多くなったと思われる。また、「話すこと」に関しても、生徒の興味を引くような話題のコミュニケーション活動では、授業中の発話も以前より活発になり、声量も大きくなった。

第二の目標として挙げた、授業や活動の目標を明確にすることや、目標の達成状況を測る適切な評価規準と評価方法を検討することに関しても、一定の成果を上げることができた。特に**実践4**で実施した定期テストの英作文に関しては、今までは一文字も書くことなくあきらめていた生徒が、事前にテーマや評価の観点を与えることで、見違えるような英作文を書くようになった。文法の誤りを恐れるあまり、書くことに意欲をなくしていたが、内容を重視することで前向きに取り組もうとする態度を養うことができたと考えられる。

今後は、文法的な誤りが少なく、論理的な英文を書くことができるように指導していくことが課題である。また、より実践的な、その場で話したり書いたりする力も養っていく必要がある。これらの課題を解決するために、他の科目の授業とも連携し、また、他の英語科教員とも協力しながら課題に取り組んでいきたい。

5 参考資料

- ・ETS 『TOEFL iBT Writing Section Scoring Guide』 <http://www.ets.org/toefl/ibt/scores>
- ・Coombe, C., Folse, K., & Hubley, N. 『A Practical Guide to Assessing English Language Learners』 (2007) Michigan: The University of Michigan Press

事例2 「英語Ⅱ」における指導と評価の一体化を図った工夫

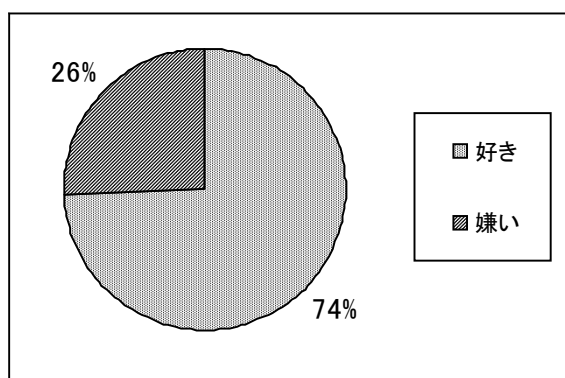
1 生徒の実態把握及び課題の設定 ～事前アンケート結果から～

(1) 事前アンケート（6月に実施）

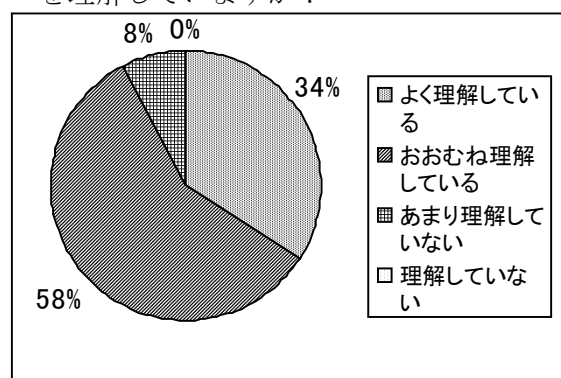
英語学習に対する意識を調査するために以下のようなアンケートを実施した。今回のアンケートの調査対象は第3年次生40名で、英語Ⅱを3単位履修している。

ア アンケート結果

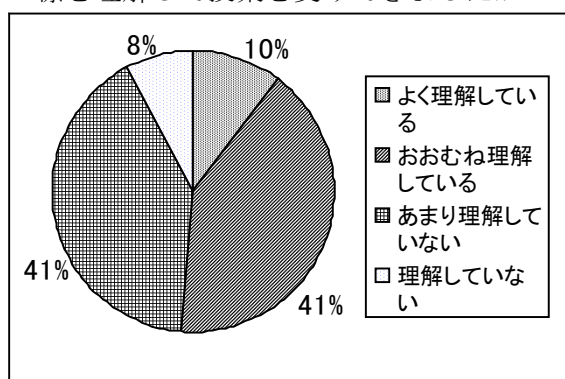
1 あなたは英語が好きですか？



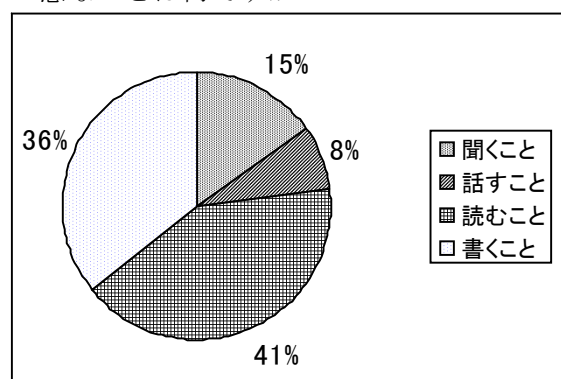
2 あなたは4月から今まで、授業の内容を理解していますか？



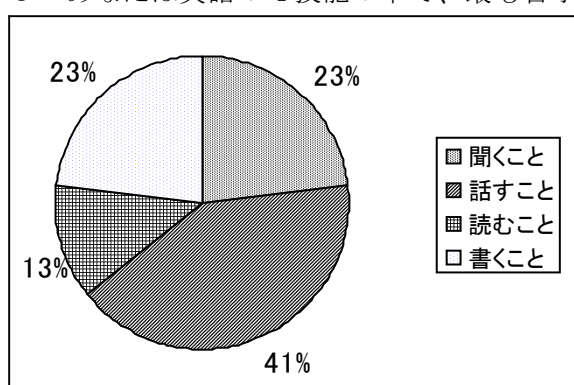
3 あなたはこれまで、その日の授業の目標を理解して授業を受けてきましたか？



4 あなたは英語の4技能の中で、最も得意なことは何ですか？



5 あなたは英語の4技能の中で、最も苦手なことは何ですか？



質問1では、74%の生徒が英語を好きであると答えている。クラス全体としては、英語に対する苦手意識が強いわけではなく、これまでも授業の中で活動をする際には、積極的に参加する様子が伺えた。また、質問2では、今までの授業についての理解度に関しては「よく理解している」「おおむね理解している」と答えた生徒が92%であった。このことから、これまでの授業の教科書の内容はおおむね理解しているようである。

しかし、質問3の授業の目標（ねらい）については、「理解していない」「あまり理解していない」と回答した生徒と、「おおむね理解している」「よく理解している」と回答した生徒はほぼ半数であった。これは、教師側が生徒に対し、その時間ごとの目標（ねらい）を強調して生徒に伝えていなかったことが原因として挙げられる。そのため、生徒もその目標（ねらい）を意識することなく授業を受けてきたものと思われる。

質問4では、英語の4技能の中で「読むこと」を得意とした生徒（41%）と「書くこと」を選んだ生徒（36%）の方が、「話すこと」「聞くこと」を選んだ生徒よりも目立って多いことが分かった。また、質問5の苦手なことについては、「話すこと」を選んだ生徒が際立って多く（41%）、続いて「聞くこと」「書くこと」がそれぞれ23%で、「読むこと」が13%という結果となった。このことから、このクラスの生徒が「話すこと」「聞くこと」の技能において苦手意識をもっていることが分かった。

(2) アンケートから見た課題とその改善方策

アンケート結果から、対象の生徒は多くが「英語が好き」であるが、同時に「話すこと」「聞くこと」という技能に苦手意識をもっていることが分かった。これら2つの技能は、口頭でのコミュニケーションにおいて不可欠なものである。普段の授業においては、書かれた英語を口頭で読む、答える、あるいは、教科書に関する英語を聞くなどの活動で終わってしまうことが多く、生徒が自分の考えを表現したり、英語を聞いて返答したりする自由度の高い活動を実施することができなかった。その結果、生徒は「話すこと」「聞くこと」の技能に関して、練習不足のような感覚をもってしまい、苦手であると意識しているのではないかと考えた。

したがって、生徒が「英語を使って自分の意見を発信できた」「英語を聞いて相手の意図を読み取ることができた」などの経験を多くすることで、「話すこと」「聞くこと」の技能に対する苦手意識を払拭できると考えた。その改善方策は、生徒が「英語を使っている」と実感できる活動を数多く取り入れることである。しかしながら、突発的な題材を用いての活動では、生徒がその活動の必要性をあまり感じることはできないと思い、教科書の内容に沿って活動させようと考えた。そうすれば、活動に対する意欲を向上させることができ、身近な題材を扱うことで学習に取り組みやすくなるだろうと感じたからである。また、教科書の題材による活動であれば、教科書の内容や文法事項に対して理解をより深めることができる。さらに、数多くの活動を実施することで、その都度の評価を蓄積することができ、次の活動へのフィードバックをすることができるので、指導と評価の一体化が図れるのではないかと考えた。そして、効果的に英語を用いた授業の展開をすることで、生徒の英語を聞く量も増やすことができると考えた。

以上のことから、本調査研究では、生徒に「話すこと」「聞くこと」の技能を磨く場面を数多く設け、英語に対する苦手意識を減らすことを研究の目標とした。

2 事例実践（１）

（１）本事例で扱う単元

ア 単元名：Lesson 7 WHAT DO WE NEED TO CHANGE THE WORLD? — BONO'S CHALLENGE

使用教科書：Powwow English CourseⅡ（文英堂）

イ 単元の目標：仮定法を表す表現を用いて、英語で自分の意見を言うことができる。

ウ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
A 積極的な態度で活動に参加し、自分の意見や考えを既習の文法事項や単語を使って相手に伝えようとしている。	B 仮定法を用いて、自分の考えや意見を英語で表現することができる。	C1登場人物に関する英語を読み、その人物の言動やその言動の理由を理解することができる。 C2本文を読んで、登場人物がどのようにしてアフリカに関わりをもつようになったのかを理解することができる。	D1事実とは異なる内容を伝える表現（仮定法）の使い方を理解している。 D2最貧国で人々が亡くなっている様子や原因について理解している。

エ 単元の指導計画

時間	指導内容	評価規準との関わり	評価方法
1	インターネット上で、英語で書かれたボノに関する情報（Wikipedia）を最初に教師が読んで聞かせ、個人で読んだ後、グループで読ませる。グループで内容を確認した後、発表させる。(実践1)	C1	観察、発表内容
2 (Part 1)	ボノとはどのような人なのかを読み取らせる。	A、C1	ワークシート、Q&A
3 (Part 2)	ボノがライブ・エイドで学んだことを読み取らせる。	C2	ワークシート、Q&A
4 (Part 3)	ボノがエチオピアで何をしたかを読み取らせる。(実践2)	C2	ワークシート、Q&A
5 (Part 4)	DATAの活動について読み取らせる。	D1	ワークシート、Q&A
6	自分がボノだったらと仮定して、貧困に苦しむ国を助けるために自分に何ができるかについて英語で書かせる。	B、D2	ワークシート、Q&A

（２）実践１ ワークシートによる導入

ア 活動内容

ボノに関する英語を読み、どのような人物で、どんなことをしている人なのか、興味喚起する。教科書ではなく、実際にインターネット上で使われている生の英語から情報を得ることで、英語学習についての動機を高める。

イ 指導手順

(ア) Wikipedia等でボノについて書かれている記述を探させる。〈資料1〉

〈資料1〉 生徒に配布したプリント（表面）

BONO FROM WIKI

Paul David Hewson (born 10 May 1960), known by his stage name Bono (/ˈboʊnoʊ/), is an Irish singer-songwriter, musician, venture capitalist, businessman, and philanthropist. He is best recognized as the frontman of the Dublin-based rock band U2. Bono was born and raised in Dublin, Ireland, and attended Mount Temple Comprehensive School where he met his future wife, Alison Stewart, and the future members of U2. Bono writes almost all U2 lyrics, frequently using religious, social, and political themes. During U2's early years, Bono's lyrics contributed to their rebellious and spiritual tone. As the band matured, his lyrics became inspired more by personal experiences shared with the other members.

Outside the band, he has collaborated and recorded with numerous artists, is managing director and a managing partner of Elevation Partners, and has refurbished and owns The Clarence Hotel in Dublin with The Edge. Bono is also widely known for his activism concerning Africa, for which he co-founded DATA, EDUN, the ONE Campaign and Product Red. He has organised and played in several benefit concerts and has met with influential politicians. Bono has been praised and criticised for his activism and involvement with U2. He was granted a knighthood by Queen Elizabeth II of the United Kingdom, and, with Bill and Melinda Gates, was named Time Person of the Year in 2005, among other awards and nominations. On 17 July 2013, the BBC announced that Bono had been made a Commandeur of the French Ordre des Arts et des Lettres (Order of Arts and Letters).

生徒に配布したプリント（裏面）

WHO IS BONO?

Paul David Hewson (born 10 May 1960), known by his stage name Bono (/ˈboʊnoʊ/), is an Irish singer-songwriter, musician, venture capitalist, businessman, and philanthropist. He is best recognized as the frontman of the Dublin-based rock band U2. Bono was born and raised in Dublin, Ireland, and attended Mount Temple Comprehensive School where he met his future wife, Alison Stewart, and the future members of U2. Bono writes almost all U2 lyrics, frequently using religious, social, and political themes. During U2's early years, Bono's lyrics contributed to their rebellious and spiritual tone. As the band matured, his lyrics became inspired more by personal experiences shared with the other members.

〈QUESTIONS〉

1. How old is he?
2. What does he do?
3. What is the name of his wife?
4. Where was he brought up?

(イ) 教科書を読むうえで知っておくべき個所を抜粋させる。

(ウ) 必要があれば注釈を載せる。（今回は注釈の説明に英英辞典を使用した。）

ウ 留意点

情報量が多すぎると、時間がかかりすぎたり生徒の動機が高まらなかったりするため、ねらいから外れてしまう。必要に応じて文章を簡潔に編集するとよい。

エ 評価

この実践では、活動に対する取組状況やグループでの話し合いの様子を観察するとともに、英文の内容に関するQ&Aで、評価規準C1（外国語理解の能力）について評価を行った。

評価規準C1：登場人物に関する英語を読み、その人物の言動やその言動の理由を理解することができる。



（生徒の様子）

登場人物のボノについて知っている生徒はほとんどいなかったため、生徒は興味をもって積極的に活動に取り組んだ。しかし、意味の確認では日本語の使用がメインになってしまっていた。



（評価）

英文を読み、ボノの人となりやその言動を理解することができた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、ボノの言動に対して、その理由まで理解できた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。なお、英文を読むのに時間がかかったり、質問に答えられなかった生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、授業中の机間指導において読み取るヒントを与えるなどして個別に指導した。

(3) 実践2 Paragraph chartを用いたワークシートによる内容理解

ア 活動内容

「これまでのアフリカ支援について」と、「ボノが他の有名人とどのように異なるか」という点について読み取ることができる。

＜資料2＞ 生徒が作成したワークシート

イ 指導手順

(ア) ねらいを生徒に示し、どの点に注意して文章を読めばいいのかを確認させる。

(イ) Paragraph chart＜資料2＞を作成し、個人で作業させた後、ペアで答え合わせをさせる。

ウ 留意点

パラグラフごとの要約になるように作成する。

エ 評価

この実践では、ワークシートを提出させ、その内容と、ペアワークの様子を観察して、評価規準C2（外国語理解の能力）について評価した。

評価規準C2：本文を読んで、登場人物がどのようにしてアフリカに関わりをもつようになったのかを理解することができる。



（生徒の様子）

この活動では、Today's Aim（ねらい）を最初に明示することで、生徒はポイントを絞って読むことができ、内容理解がしやすくなることをねらいとした。活動の様子を観察したところ、生徒にとってはねらいを明確にしたことで、内容理解がしやすかったようである。



（評価）

本文を読んで、ワークシートを1、2ヶ所の空欄だけでその他はきちんと埋めることができた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、ワークシートを全て埋めることができた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。なお、ほとんどが空欄の生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、授業中の机間指導において個別で指導した。

PART1

The aim of this lesson → ①これまでのアフリカ支援はうまくいってなか。 ②ボノは他の有名人とが「違う」点。

Paragraph Chart
本文を読んで、()に入る適切な表現を記入してみよう。

Paragraph 1: お金がたくさんあっても、大事なものは、そのお金の正しい使い方だ。

Paragraph 2: これまでは？
1948年、ボノが最初にアフリカと(関わりをもった)時は、アフリカの貧しい国々を手助けするために(多くの)運動家や組織(が)奮闘して(きた)。

⇒問題点は(アフリカのために最初に何をすべきか同意がなかったし、お金も少なかった。……これは(問題)が大きすぎるし、複雑すぎる)だからだ。

Paragraph 3: Bonoは何者？
ボノは(貧しい人のためにお金を払うよう人々にお願いする)と思われることもあるが、(あまたの)有名人世界の(不平等)に対して戦う(人)たちの一人で、実際に成果を上げている。

1. 今日の授業の目標を、意識して授業に臨めた。	Yes	No
2. ボノとアフリカとの関係がいつからなのかが分かった。	Yes	No
3. これまでのアフリカへの援助がどのようなものだったかわかった。	Yes	No
4. 今日の授業の内容がよくわかった。	Yes	No

3 事例実践（２）

(1) 本事例で扱う単元

ア 単元名：Lesson 8 LIVING WITH ANIMALS by Konrad Z. Lorenz

イ 単元の目標：教科書本文の内容を、絵を補助的に使って英語でリテリングすることができる。

ウ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
A 自分の意見や表現したい内容について、既習の文法事項や単語を使って相手に伝えようとしている。	B ペアが閉本していても、内容が理解できるように音読することができる。	C1日本語を介さずに、本文の内容を理解することができる。 C2本文を読んで、登場人物の心情や行動の理由等を読み取ることができる。	D 正しい語順や語法を用いて文を構成する知識を身につけている。

エ 単元の指導計画

時間	指導内容	評価規準との関わり	評価方法
1	課の導入として、飼っている動物について、ペアで話し合わせる。この課の筆者の場合はどうか、教師によるオーラルイントロダクションで概要をつかませる。絵を通して、抽出した新出単語の意味の確認をペアで行わせる。(実践3)	→ A	ペアワークの観察、Q&A
2 (Part 1)	筆者が妻に宛てた感謝の手紙を読ませた後、ワークシートを用いて、自分の家族に宛てて手紙を書かせる。(実践4)	→ D	観察、ワークシート
3 (Part 1)	筆者の家でのハイイロガンに関するエピソードについて、読んだ内容を絵で描かせる。(実践5)	→ C1	観察、ワークシート
4 (Part 2)	筆者が思いついた実験について読み取らせる。その内容についての絵を描き、その状況について絵を用いてペアに英語で説明させる。(実践6)	→ C1	観察、ワークシート
5 (Part 2)	筆者の行ったマガモの実験に関するエピソードについて読み取らせる。ペアワークで、一方が教科書を閉じ、もう一方は教科書の内容をペアが理解できるよう工夫して読ませる。	B	観察、ワークシート
6 (Part 2)	筆者がマガモの実験をした情景と、その様子について読み取らせる。	C2	観察、ワークシート

(2) 実践3 絵を用いた新出単語の導入

ア 活動内容

日本語を介さずに、絵を用いて英単語の意味を考えることができる。

イ 指導手順

(7) その日学習する範囲から、4つの新出単語を無作為に選ばせる。

(イ) その単語を絵で表現させる。

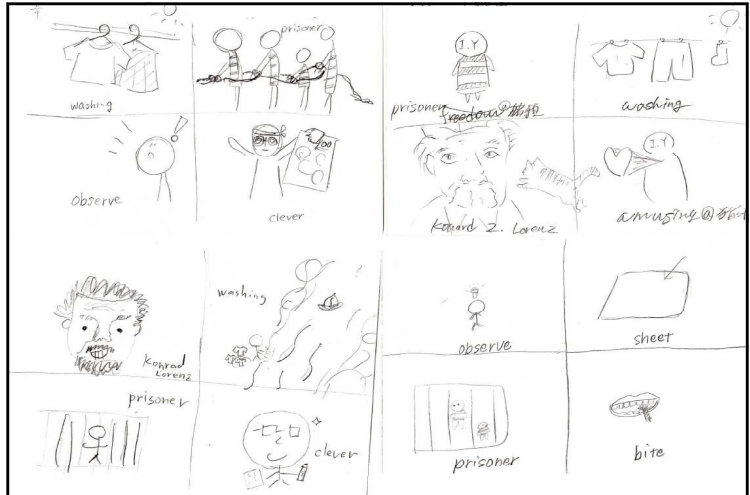
＜資料3＞ 生徒が描いた絵

＜資料3＞

(ウ) ペアで描いた絵を交換し、その絵が表す英単語を答えさせる。

ウ 留意点

描いた英単語について相手が分からなかったり間違えていたりしたら、英語でヒントを与えるようにした。



エ 評価

この実践では、ペアワークの様子を観察し、評価規準A（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）について評価した。

評価規準A：自分の意見や表現したい内容について、既習の文法事項や単語を使って相手に伝えようとしている。



（生徒の様子）

実際にやってみると、品詞によっては絵で表現しづらいことが分かった。しかし、どんな品詞が絵で描きづらいのか確認することができた。活動の様子を観察すると、この活動は生徒にとって比較的負荷が少なく、楽しみながらも自分の言葉で相手に伝えようとしていた。



（評価）

自分の描いた絵について、自分の言葉で相手に伝えようとしている生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、自分の描いた絵について、多様な表現を使って相手が理解できるまで十分に説明している生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。説明の途中で日本語を交えている生徒を「努力を要する」状況（C）と判断した。そうした生徒については、日本語を使わないことを徹底させ、その代わりジェスチャーを交えて説明するように指示した。

なお、今回の活動はレッスンの導入として実施したが、同様に絵を描かせる活動は**実践5**、**実践6**でも発展形として活用する。

(3) 実践4 教科書本文を利用して、家族に感謝の手紙を書く

ア 活動内容

既習の単語や文法と、本文で学んだ感謝を表現する文章を参考にして、自分の家族に対して感謝の気持ちを述べる英文を書くことができる。

イ 指導手順

(7) （この後の活動について詳しい話をしないまま）本文で扱った、妻に対して感謝を述べている文章を個人で読んだり、ペアで読んだりさせて、文章の形、話の流れを理解させる。

(イ) 教科書は閉じさせワークシート＜資料4＞を配り、家族の誰かを選んで感謝の手紙を書く。

(ウ) 出来上がった手紙をペアやグループでシェアし、何人かを指名して発表させる。

ウ 留意点

手順(7)の時点で、ワークシートを配ってしまうと、本文のまま単語だけを入れ替えた文になってしまいがちなので、上記のような手順とした。ワークシートには大まかな枠になるような部分だけ与えるようにした。

エ 評価

この実践では、ペアやグループでの活動の様子を観察するとともに、ワークシートを提出させ、その内容を取組状況の判断材料として活用し、評価規準D（言語や文化についての知識・理解）について評価した。

評価規準D：正しい語順や語法を用いて文を構成する知識を身につけている。



（生徒の様子）

英作文が苦手な生徒にも書きやすいように、教科書に沿った枠を与えたが、逆に書ける形が限定されてしまって書きづらい生徒もいた。必要であれば使えるように、選択肢として与える程度の方が作文の自由度の幅が広がったのではないかと思われる。しかし、生徒は何とか自分の言葉で手紙を書こうとしていた。



（評価）

数個の間違いだけで手紙を書けた生徒は「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。間違いがほとんどなく、多様な表現を用いて手紙を書いた生徒は「十分満足できる」状況（A）と判断した。なお、意味をなさない構造の英文を書いた生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、そうした生徒については、提出させたワークシートを添削し、返却時に個別指導をすることで対応した。

<資料4> 生徒が作成したワークシート

Lesson8 Living with Animals by Konrad Z. Lorenz

TODAY'S AIM: Review and Write to your family

A Answer the questions below.

1. What is the writer doing with the animals?
He ~~live~~ with animals, observing and experimenting with the

2. What does he thank his wife for?
He thank ~~his~~ wife for being patient.

3. What does he wish?
He wish ~~his~~ all animals could live freely with us instead of

B Guess the words behavior being prisoners in a cage.

1. the way of acting : [~~obsorb~~]

2. to watch somebody/something carefully, especially to learn more about them
[~~behavior~~] obsorb

3. to try various ideas, methods, etc to see whether they will work or what effect they will have : [experiment]

C Make your own story.

I am studying [playing the piano lesson every Monday]

I live [coming back home and practicing the piano half an hour]

I thank [my mother] for [drive me to and from home].

What other [mother] would allow

[mother goes up and down the road three times]?

Who else would allow []?

What would [my mother] say if...? I could go on asking for 20 pages!

(4) 実践5 状況を理解して絵で表現する活動

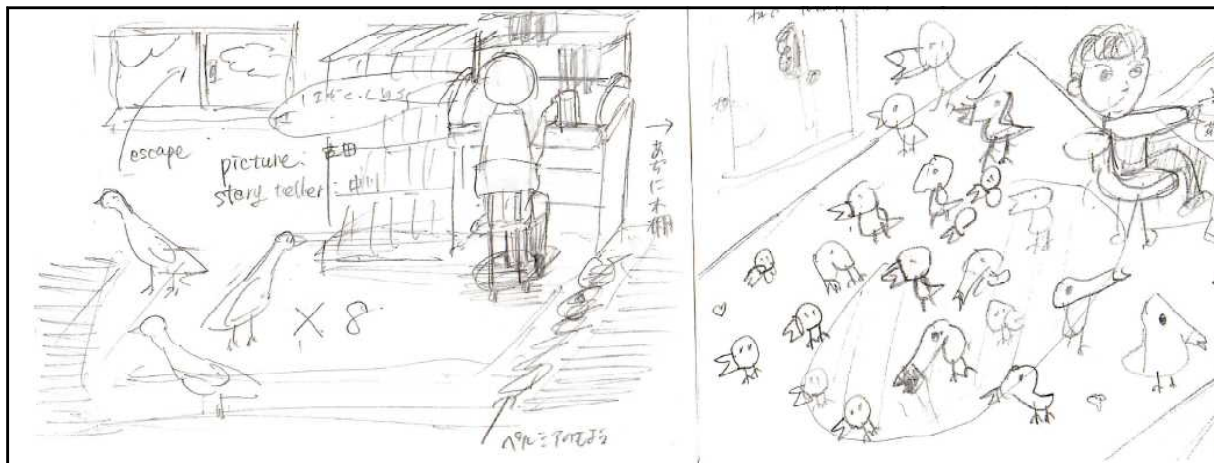
ア 活動内容

英文を読んで、理解した内容を絵で表すことができる。

イ 指導手順

- (7) パラグラフを指定し、個人で読ませる。
- (イ) その状況を絵に描かせる。＜資料5＞
- (ウ) ペアで答え合わせをさせる。

＜資料5＞ 生徒が描いた絵



ウ 留意点

生徒が描写しやすい場面を選ぶ。

エ 評価

この実践では、ペアワークの様子を観察するとともに、ワークシートを提出させ、その内容を取組状況の判断材料として活用し、評価規準C1（外国語理解の能力）について評価した。



図1 授業中の様子

評価規準C1：日本語を介さず、本文の内容を理解することができる。

↓（生徒の様子）

ペアワークの様子を観察すると、同じ英文を読んで、同じ状況を描かせても生徒によって視点が異なっていて、答え合わせをしても生徒は楽しんで活動していた。

↓（評価）

ペアワークで、自分が描いた絵を、日本語を使わずに英語で説明できた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。また、より多様な表現を用いて、相手に伝わるように説明している生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。なお、**実践3**と同様に日本語を使って説明していた生徒を「努力を要する」状況（C）と判断した。そうした生徒には、机間指導の際に、ジェスチャーを交えるなど工夫してできるだけ英語を用いて説明するように個別指導を行った。

次の**実践6**では、同様の活動をさらに英語を使用するものに改善して、生徒のアウトプットを増やしたい。

(5) 実践6 状況を理解して絵で表現し、英語でそれを説明する活動

ア 活動内容

実践5の活動を発展させ、状況を理解して絵で表現し、それをもとにしてペアにその状況を英語で説明することができる。また、説明された状況を英語で表現することができる。

イ 指導手順

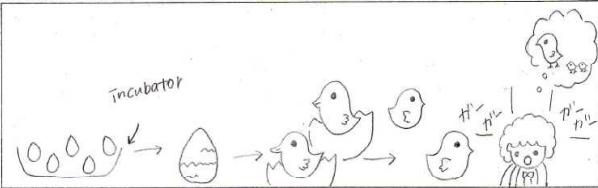
- (ア) ペア (A、B) で異なるパラグラフを指定し、個人で読ませる。
- (イ) その状況を絵に描かせる。＜資料6＞
- (ウ) Aに自分の絵を用いて、Bに対して状況を説明させる。
- (エ) Bにその説明を聞いて、その状況の描写を英語で表現させる。
- (オ) A、Bが交換して手順(ウ)(エ)を行う。
- (カ) 4～5人のグループになり、絵や英文を発表させる。

＜資料6＞ 生徒Aが作成したワークシート

LESSON6 LIVING WITH ANIMALS BY KONRAD Z. LORENZ

TODAY'S AIM: 読解、英作

A Draw a picture of the situation. You can divide the square as you like.
I put some mallard eggs in the incubator so that they might hatch on a Saturday in May. That day the baby mallards were born. As soon as they were dry, I quacked for them in my best Mallardese. I quacked and quacked for hours on end. "I wish I could quack like a real mother mallard." I thought.



B Describe the situation
Look at your partner's picture and explain the situation in English.
You can use some key words below. Don't open your textbook.

- He quacked for baby mallards
- He moved slowly away quacking.
- They started to follow him.
- They looked him as if he were real their mother.

Key words: the baby mallards, quacking, afraid, follow

Self Evaluation

1. Pair Reading で相手に意味がわかるように読めた	Yes / No
2. Aの活動を積極的にできた	Yes / No
3. Bの活動を積極的にできた	Yes / No
4. 今日のねらいが達成できた	Yes / No



生徒Bが作成したワークシート

LESSON6 LIVING WITH ANIMALS BY KONRAD Z. LORENZ

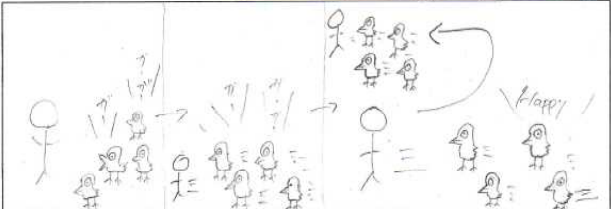
TODAY'S AIM: 英文の理解、英作文の能力 (単語 10点)

A Describe the situation
Look at your partner's picture and explain the situation in English.
You can use some key words below. Don't open your textbook.

Mallard was hatched from incubator.
They quacking Mallardese.
They follow mother.

Key words: Mallard, incubator, hatch, quack, Mallardese

B Draw a picture of the situation. You can divide the square as you like.
To my great joy, the quacking was successful. Clearly the baby mallards weren't afraid of me this time. As I moved slowly away from them, still quacking, they started to follow me in a group. They looked as if they were happily following their mother!



Self Evaluation

1. Pair Reading で相手に意味がわかるように読めた	Yes / No
2. Aの活動を積極的にできた	Yes / No
3. Bの活動を積極的にできた	Yes / No
4. 今日のねらいが達成できた	Yes / No



ウ 留意点

3～4コマで説明できるパラグラフを選ぶ。状況の描写が目的であるので、その場面でキーワードになりそうな単語をあらかじめ与えておく。

エ 評価

この実践では、前の実践5と同様に、ペアワークの様子と提出させたワークシートを取組状況の判断材料として活用し、評価規準C1（外国語理解の能力）について評価した。

評価規準C1：日本語を介さず、本文の内容を理解することができる。

↓ (生徒の様子)

ペアワークの様子を観察したところ、説明する側の生徒は、自分の描いた絵があるので、既習の単語を用いて話そうとしている姿が多く見られた。説明を受けて英文を描く側の生徒も、単文が多かったが、自分の言葉、表現で英作文をしようとする努力が見られた。また、回収したワークシートを確認したところ、生徒の英作文では、時制や人称等の文法的な間違いが多く見受けられた。間違いが予想される部分については、事前に板書するなどして注意喚起しておくとうよかったと思われる。しかし、今回の実践はそのような文法事項に関してよりも、教科書の内容に沿った英文を描くことを第一の目的としていたため、間違いは気にせず、まず書くことを奨励した。

↓ (評価)

説明をする際に、日本語を使わず、既習の単語を用いて自分の言葉で説明していたり、説明を聞いて英文を書く際に、自分の言葉、表現で英文を書いた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。説明する際、英文を書く際に、より多様な表現を用いて、スペルミス等間違いが少なかった生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。なお、説明をする際に日本語を使っていたり、書いた英文が絵とマッチしていない生徒を「努力を要する」状況（C）と判断した。そうした生徒については、ペアワーク時に自分が述べようとしている内容に関してヒントを与えたり、ワークシートを添削して返却するなどして対応した。

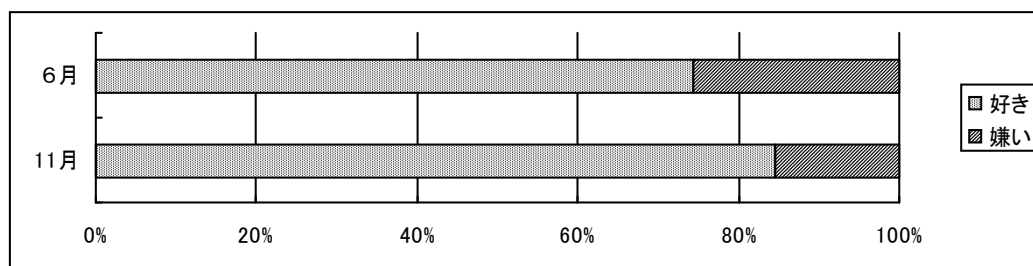
4 検証とまとめ

(1) 事後アンケート（11月に実施）による検証

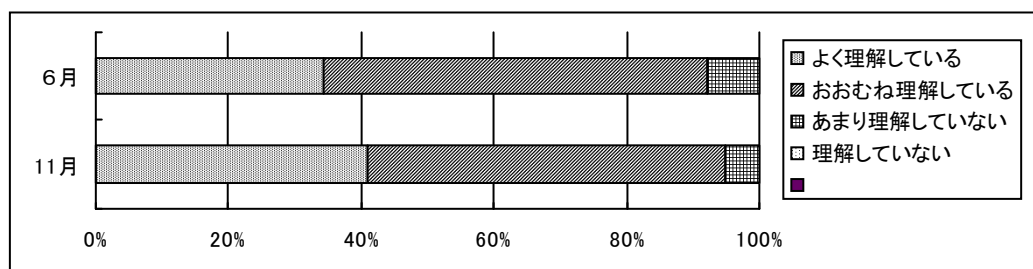
これまでの活動を通して生徒の意識がどのように変化したかを確認するために、最初のアンケートに答えた生徒と同じ集団に対し、同じ質問項目でアンケートを実施した。

ア アンケート結果

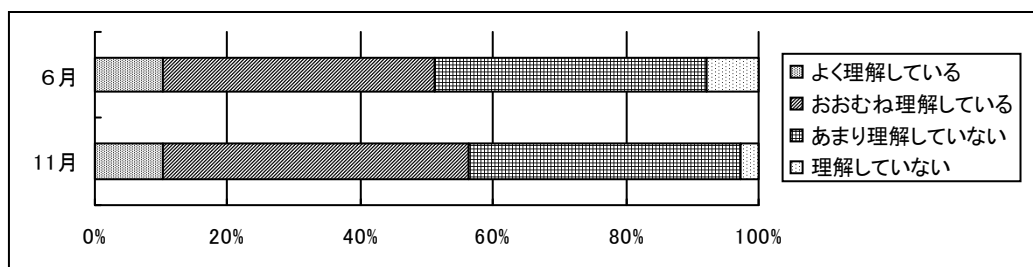
1 あなたは英語が好きですか？



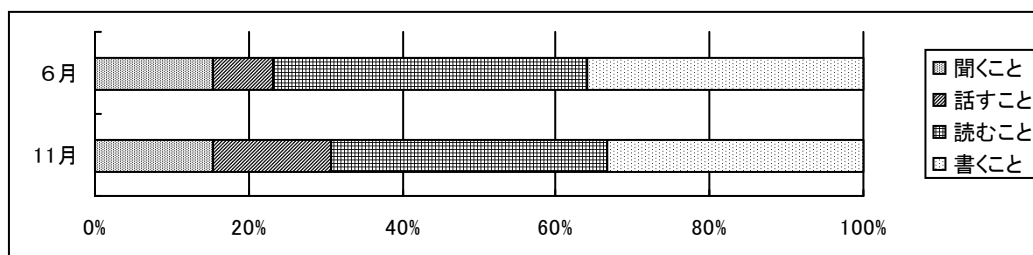
2 あなたは4月から今まで、授業の内容を理解していますか？



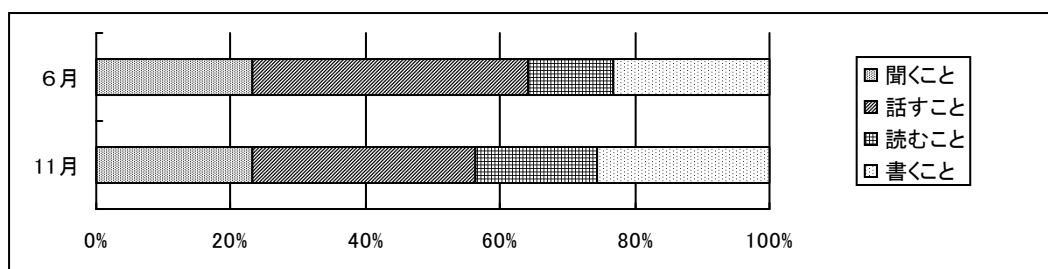
3 あなたはこれまで、その日の授業の目標を理解して授業を受けてきましたか？



4 あなたは英語の4技能の中で、最も得意なことは何ですか？



5 あなたは英語の4技能の中で、最も得苦手なことは何ですか？



イ アンケート分析（6月と11月の比較）

「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の英語の4技能に関して、6月のアンケート結果の考察では、このクラスの生徒が、「話すこと」「聞くこと」の2技能において苦手意識をもっていると言及した。そこで、11月のアンケート結果をその点に着目して分析する。

最も注目すべき点は、得意な4技能を問う質問に対して、「話すこと」を選んだ生徒が、少数ではあるが増加したことである。6月では「話すこと」を選んだ生徒が8%であったのに対し、今回は15%とほぼ倍増している。

これは、授業の中で英語を話す活動をこれまで以上に多く取り入れた成果ではないかと考える。教科書の内容によって、その内容に合う活動を考えてペアやグループで英語を使う場面を増やしたことで、「話すこと」に対する苦手意識が少しでも改善できたのではないかとと思われる。

(2) まとめ

本調査研究では、教科書の内容に沿って英語を使う活動を考え、実践してきた。常に念頭においていたことは、いかにして生徒に少しでも多くの英語を話す気にさせるかということである。それと合わせて、活動内容を考える中で、生徒にはできるだけ自分の意見を含んだ内容や、既習の単語や表現を用いて自分自身のことについて英語で表現させたいと考えた。

この調査研究では「指導と評価の一体化」を目標に掲げた。活動を行い、その都度改善点を考えて次の活動に生かしていくことは、生徒に到達してほしい目標を少しでも達成させるように授

業をデザインすることにつながると感じた。教科書の素材を生徒自身の生活や経験などに置きかえてみたり、多くの生徒が取り組みやすいように絵を描くことを取り入れたりするなど、考えを巡らせるのは教師側としても楽しかった。時間をかけて活動を考えて実施する授業では、生徒が生き生きと英語を使おうとする姿を見ることができ、時間をかけて考えた甲斐があったと実感することもたびたびあった。普段から「話すこと」「聞くこと」に苦手意識を感じているという印象をもってはいたが、改めてアンケートで問うことで、意識的にその2点に力点をおいたワークシートを作ったり、授業を進行したりするきっかけとなった。

また、いい意味で予想を裏切られるということも起こった。例えば**実践6**では、教科書の内容の、ある場面を絵に描いてパートナーに説明するという活動を実施した。最初、これらの活動はハードルが高すぎるかと思っていた。しかし実際に活動の様子を見たり、回収したワークシートの英文を見てみると、予想していたよりもずっとよく書けていた。そして、その活動では、話す側も聞く側も真剣に取り組む姿が印象的であった。ネイティブのような発音ではないが、友人の話す英語を一生懸命聞いて、そこから自分なりの文でその状況を説明している様子を見て、少し難しい、という難易度が生徒の知的好奇心を刺激するとともに、達成感も味わわせることができるので有効であることが分かった。

今回の調査研究で、「指導と評価の一体化」とはどのようなものであるかを深く考える機会を得た。その都度の評価で生徒のモチベーションが上がること、さらには各授業におけるねらいを明示することで、生徒も「これができるようになればいいんだ」と理解することができるという点において、教師が「指導と評価の一体化」を意識することはとても意味のあることだと分かった。また、その評価を受けて改善点を見出し、次の授業、活動へと生かしていくことは、授業を進めていく教師側にとっても、授業を受ける生徒側にとっても、次から次へと道しるべを示されて、英語上達へのヒントを与えられているようで非常に有効であると言える。これらの点を念頭におき、「生徒が多くの英語を聞いて、話し、読んで、書く授業」をモットーに今後も精進していきたい。

5 参考文献

- ・Adrian Doff 『Teach English TRAINER'S HANDBOOK』CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS
- ・卯城祐司編 『英語で英語を読む授業』研究社
- ・金谷憲編 『高校英語教育法高校英語の授業マニュアル訳読OnlyからのTake off』アルク

事例3 「リーディング」における指導と評価の一体化を図った工夫

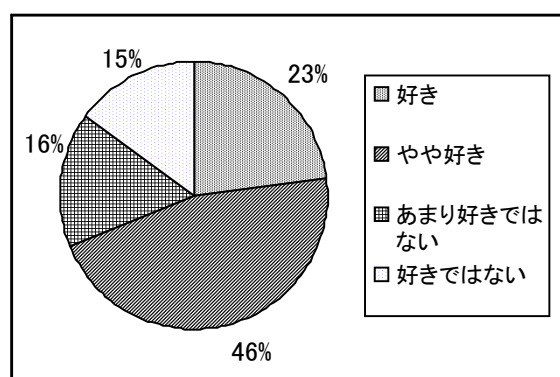
1 生徒の実態把握及び課題の設定 ～事前アンケート結果から～

(1) 事前アンケート（6月に実施）

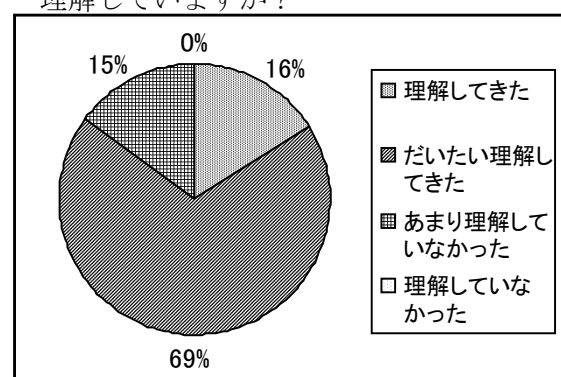
英語学習に対する意識を調査するために、以下のようなアンケートを実施した。今回のアンケートの調査対象は、リーディングを4単位履修している3、4年次生徒計13名である。

ア アンケート結果

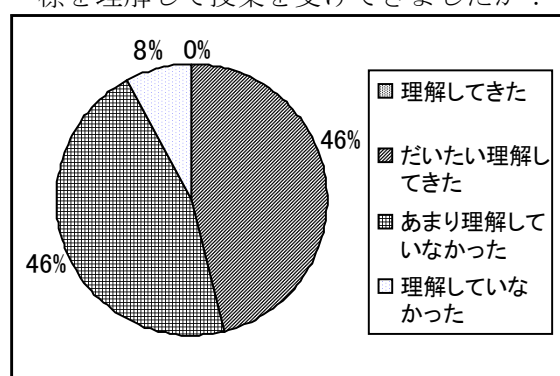
1 あなたは英語が好きですか？



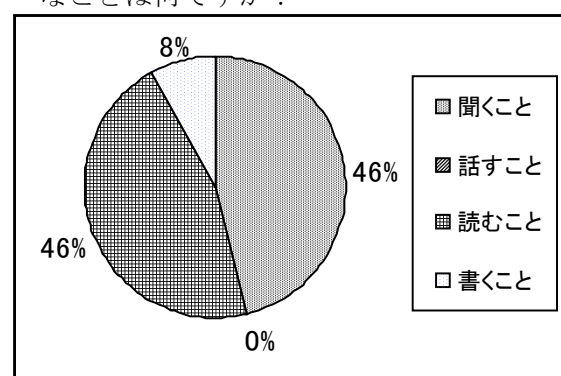
2 あなたは4月から今まで、授業の内容を理解していますか？



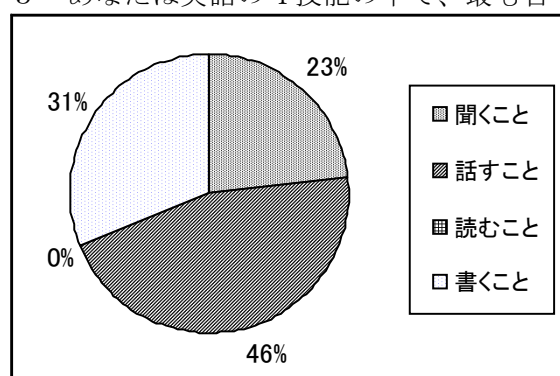
3 あなたはこれまで、その日の授業の目標を理解して授業を受けてきましたか？



4 あなたは英語の4技能の中で、最も得意なことは何ですか？



5 あなたは英語の4技能の中で、最も苦手なことは何ですか？



(2) アンケートから見えた課題とその改善方策

質問1では、英語が好きだと答えている生徒が過半数を占め、英語学習に対する抵抗感は少ない。一方で、質問3の授業のねらいを理解して授業を受けているかの問いに対しては、理解していないと回答している生徒が半数であった。また、質問4、5での生徒の英語の4技能の得意、不得意分野に関する質問からは、生徒たちは、インプットに関わる活動（読むこと、聞くこと）を得意とし、一方、アウトプットに関わる活動（書くこと、話すこと）を苦手としていることが分かる。今回の研究対象クラスは小人数ではあるが、日常においても他者との関わりに対して、どちらかと言えば苦手意識をもっている生徒が多いクラスである。

このアンケートの結果及びリーディングという科目の特性を踏まえ、本調査研究を実践する上で、下記のような目標を設定した。

- ①ペアワークやグループワーク、また、教師とのやりとりにおいて、コミュニケーションに対し前向きな姿勢をもち、協力して対話等を行う。
- ②英語の文章を読み取るための様々なスキルを理解し、それを活用する。
- ③読み取った英語の文章について、その内容を他者に伝えたり、その内容に関する自分の意見を他者に伝える。

2 事例実践（1）

(1) 本事例で扱う単元

ア 単元名：Lesson 9 (Part 1) Black Tea and Green Tea
(Part 2) Squid Ink and Octopus Ink
使用教科書：BIG DIPPER Reading Course（数研出版）

イ 単元の目標：(Part 1) 紅茶と緑茶の製法や飲み方に関する共通点・相違点を理解するとともに、自分の考えを対比の表現を用いて話すことができる。
(Part 2) 似て非なるものを取り上げ、その類似点と相違点を対比の表現を用いて話すことができる。

ウ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
A 授業でのペアワークや教師とのやりとりにおいて前向きに對話をしようとしている。	B1本文の内容について、メモを見ながらリテリングすることができる。 B2本文で学んだ内容に対比の表現を用いて書くことができる。	C 本文中の語句や表現について、ペアワークで的確に聞き取ることができる。	D 対比を提示する表現の用法を理解している。

エ 単元の指導計画

時間	指導内容	評価規準との関わり	評価方法
1	話題の導入、オーラルイントロダクション（実践1） 新出語句・表現の定着活動（実践2）	→ A → C	観察、ワークシート

2	新出語句・表現の確認、対比を意識してメモ作成（実践3）	→ D	観察、ワークシート
3	教科書文章の内容理解		
4	教科書本文のリテリング（実践4）	→ B1	観察、ワークシート
5	飲み物に関する英作文（実践5）	→ B2	

(2) 実践1 オーラルイントロダクション

ア 活動内容

教師と生徒、または生徒同士で、英語を用いたインタラクションをすることができる。

イ 指導手順

(7) 教師が英語で教科書の文章の話題に関する簡単な説明や問いかけをする。

(4) 一斉に、または指名して、英語の発問に答えさせる。必要に応じて質問に対してペアで考えさせる場面も取り入れる。

<実際に行ったオーラルイントロダクション> (Lesson 9 Part 1)

T : (写真を見せて)

T : Look at this picture. You can see a bottled green tea. Do you sometimes drink bottled green tea? ...Yes?

S : ... (沈黙)

T : (写真をもう一度見せて)

T : Green tea is popular not only in Japan. It's popular all over the world and this tea is a tea sold in a foreign country like U.S. Look at the picture closely and you can find some things unusual.

T : (生徒に写真を渡して、ペアで写真を見て日本のお茶と何が違うか見つけさせる。)

T : Did you find something unusual?

S : シトラス?

T : You found citrus on the label. Yes, this is a tea with citrus flavor. Do you know what a citrus is?

S : あの柑橘の...

T : Yeah, that's right. A citrus is a fruit like an orange. Do you like to drink this tea?

S : えっ... No.

T : You can find one more unusual thing. What is it?

S : (沈黙)

T : Look here. You can see a word "diet" here. (黒板に「diet cola」と板書する。)
What does diet cola mean? It's a cola without sugar. "Diet tea" is a tea without sugar, but what's the taste? ...Yes, it's sweet. So, this is sweet green tea with citrus flavor. Do you like to drink this tea, ○○さん?

S : ああ、No.



図1
生徒に見せた写真

<実際に行ったオーラルイントロダクション> (Lesson 9 Part 2)

T : Have you ever tried pasta with squid ink? Make pairs and let's ask each other.

(Have you ever tried pasta with squid ink? と板書し、生徒が質問しやすくする。)

S : (互いに質問し合い、Yes/Noの答えが出る。)

T : How many of you have had pasta with squid ink? Please raise your hand?

S : (1人だけ手を挙げる。)

T : ○○さん, where did you eat pasta with squid ink?

S : 家で... レトルトのやつを買ってきました

T : Oh, you ate at home. Was it delicious?

S : ... So so.

T : Thank you. In this lesson, we are going to read about squid ink, so I'd like you to try pasta with squid ink. That's homework for this weekend.

S : (数人が笑う。)

ウ 留意点

この活動のねらいは、教師と生徒、生徒同士が過度に緊張しない教室の雰囲気づくりや、英語でのやりとりに慣れさせることである。生徒の学力状況を考慮し、生徒が英語を話すことを強要せず、教師の英語による発話を生徒が理解できればよいとし、生徒が日本語で発言した場合は、教師がそれを英語で言い直してフィードバックするようにした。

エ 評価

この実践では、授業中の生徒とのやりとりを観察することで、評価規準A（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）について評価を行った。

評価規準A：授業でのペアワークや教師とのやりとりにおいて、前向きに対話をしようとしている。

↓ (生徒の様子)

上記の2回どちらの活動においても、生徒がより興味をもつように、文章に関連する事柄を紹介したり、ペアで互いに質問させたりした。生徒は教師の話に注意して聞き、発問に対する答えを考え、ペアワークに熱心に取り組んでいた。ただ、ペアワークの際、消極的な性格の生徒同士のペアでは対話が始まらなかったため、教師が間に入って支援した。一方で、英語を得意とする生徒がパートナーをよく助けている姿も見られた。

↓ (評価)

前向きに対話をしようとしている生徒を「おおむね満足できる」状況(B)と判断した。また、パートナーを助けて対話を続けようとしている生徒を「十分満足できる」状況(A)と判断した。なお、消極的でなかなか対話を続けることができない生徒を「努力を要する」状況(C)と判断したが、そうした生徒についてはペアワークで間に入り個別に支援した。

本活動での教師と生徒のやりとりにおいて、生徒が発言する内容は、単語1語の発話であったり、Yes/Noといったごく初歩のものであった。この活動を、生徒の発言の多い、よりインタラクティブなものにするためには、教師が生徒の反応を受けて、さらに英語で対話を続けたり、生徒の日本語による発話を英語に言い換えることで気付きを与え、英語で話そうとする生徒の意欲を高め、対話がしやすい教室の雰囲気をつくる必要がある。

(3) 実践2 新出語句・表現の定着活動

ア 活動内容

ペアワークで語彙の定着を図る。

イ 指導手順

(ア) <資料1>と<資料2>のワークシートを生徒に配布し、一斉に全ての単語の発音を練習させる。

(イ) 生徒をペアにする。ペア内でワークシートを交換する。ペアの1人は、ワークシートを半分に折り、全ての単語を発音し、その単語の意味を言っていく。

もう1人はそれを聞いて、意味を言えた単語についてはワークシートのチェック欄にチェックを書き込む。

(ウ) 上記の活動を、数回の授業にわたって繰り返し行い、語彙の知識を定着させる。教師は、何回目かに応じて「半分以上を目指そう」「完璧を目指そう」と目標を示したり、活動後のワークシートを確認したりして、向上が見られた生徒を励ましたりする。



図2 授業中の様子

<資料1> ワークシート (変更前)

重要語句	チェックリスト	HR	氏名	(セント 語文字など)	一言一語
(1) 最近、近頃	(1)			t... d...	(1) these days
(2) ~の大半、大部分	(2)			m... o... ~	(2) most of ~
(3) ~を種にして、~によって、~で	(3)			o... ~	(3) on ~
(4) ~につれて	(4)			a... ~	(4) as ~
(5) 汚染 ※ air pollution: 大気汚染, water pollution: 水質汚染	(5)			p... ..	(5) pollution
(6) 増加する、増える	(6)			i... ..	(6) increase
(7) (値段が)高い	(7)			e... ..	(7) expensive
(8) 興味、関心	(8)			i... ..	(8) interest
(9) 電気自動車 ~に気づく、わかる ※ real-time ① 実時間 ② 実時	(9)			e... .. c...	(9) electric car
(10) ~に気づく、わかる ※ real-time ① 実時間 ② 実時	(10)			r... ..	(10) realize
(11) ~ということ	(11)			t... ~	(11) that ~
(12) 現れる、出現する	(12)			a... ..	(12) appear
(13) 実は、実際は	(13)			w... ..	(13) well
(14) 性能	(14)			p... ..	(14) performance
(15) 改善する、向上する	(15)			i... ..	(15) improve
(16) 急速に	(16)			r... ..	(16) rapidly
(17) ~に対する 要求、需要	(17)			d... f... ~	(17) demand for ~
(18) 減る、減少する	(18)			d... ..	(18) decline
(19) ~より多い、~以上	(19)			o... ..	(19) over
(20) 復帰、復活	(20)			c... ..	(20) comeback
(21) 今でも	(21)			s... ..	(21) still
(22) 直訳: 進むべき長い道がある ~時間がかかる、距離が多量に続く	(22)			h... a l... w... t... e...	(22) have a long way to go
(23) ~のライバルとなって競り合う、~と競る	(23)			r... ..	(23) rival
(24) 人気	(24)			p... ..	(24) popularity
(25) 科学技術	(25)			t... ..	(25) technology
(26) ~を(再)充電する	(26)			r... ..	(26) recharge
(27) さらに、加えて = moreover	(27)			w... is m... ..	(27) what is more
(28) 電池、バッテリー	(28)			b... ..	(28) battery
(29) (値段が)安い	(29)			c... ..	(29) cheap
(30) 急速に	(30)			q... ..	(30) quickly

<資料2> ワークシート (変更後)

重要語句	チェックリスト	HR	氏名	英訳を言えたかチェック(シ)
(1) squid	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(1) イカ
(2) octopus	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(2) タコ
(3) ink	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(3) 墨、インク
(4) common	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(4) 一般的な
(5) prepare	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(5) ~を用意する
(6) dish	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(6) 料理
(7) cheap	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(7) 安い
(8) stick to ~	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(8) ~にくっつく
(9) useful	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(9) 役に立つ、便利な
(10) add	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(10) ~を加える
(11) traditionally	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(11) 伝統的に
(12) certain	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(12) ある~
(13) medical	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(13) 医学的な
(14) property	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(14) 特性、性質
(15) by the way	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(15) ところで
(16) differently	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(16) 異なって、違ったやり方で
(17) against	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(17) ~に対して
(18) enemy	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(18) 敵
(19) release	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(19) ~を放つ、放出する
(20) form	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(20) ~を形作る
(21) mass	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(21) かたまり
(22) confuse	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(22) ~を混乱させる
(23) on the other hand	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(23) 一方で
(24) rather than ~	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(24) ~というよりむしろ、~でなくて
(25) blend	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(25) 混ざる
(26) instead of ~	☒ ☒ ☒ ☒ ☒			(26) ~の代わりに、~ではなくて

ウ 留意点

語彙力不足のために教科書の英文が理解できない生徒が多かったため、英文を読むことへの抵抗感を減らすことをねらいとして、研究期間当初は<資料1>の形式のワークシートを使用

していた。＜資料１＞のワークシートには日本語の意味をリストに載せ、その意味に相当する表現を教科書の英文から探す活動を行った。この活動に生徒はよく取り組んでいたが、１レッスンで取り上げる語数が多かったこともあり、何度か繰り返すうちに、生徒が飽きてしまう様子が見られた。また、正しい発音を身に付けられない状況があった。そのため、＜資料２＞の形式に変更した。

＜資料２＞のワークシートを使い始めた当初は、生徒は新しい活動に慣れるのに予想以上に時間がかかっていたが、教師と生徒とでデモンストレーションすることにより、生徒も要領をつかみ、時間が短縮された。**実践１**と同様、この活動においても生徒同士のペアワークに抵抗がある者が数名おり、スムーズに活動に取り組めない様子も見受けられたが、なるべくペアの組み方を変更することで、うまく活動できないペアが固定化されないように配慮した。

エ 評価

この実践では、授業中の様子を観察するとともに、提出されたワークシートの内容を確認することで、評価規準C（外国語理解の能力）について評価を行った。

評価規準C：本文中の語句や表現について、ペアワークで的確に聞き取ることができる。

↓（生徒の様子）

この実践では、生徒はそれまでの自身の学習状況を把握することができたため、常に改善や向上を目指して取り組むことができた。加えて、活動を成立させるには相手に理解してもらえるように発音する必要があるため、生徒の発音に対する意識が高まった。この活動以外の音読活動においても、より大きな声を出して発音するようになった。

今回の学習は、ワークシートを変更してから３レッスン目、同型式のワークシートとしては５枚目の活動となる。そのため、生徒はこの活動に十分に馴染んでおり、全ての生徒が積極的に助け合いながらペアワークに取り組んだ。１単元の中で、同じ活動を３回繰り返し、最後の回には半数の生徒が全ての単語の意味を身に付けることができた。ただし、この活動では、ペアワークの際、正しくない発音が見過ごされてしまうこともあるので、クラス全体での発音練習等を増やし、全員に正しい発音を身に付けさせるように工夫した。

↓（評価）

ペアワークで的確に聞き取ることができた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）と判断し、相手が聞き取りやすいように配慮して話している生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。ペアワークに抵抗があり、スムーズに活動に取り組めない者を「努力を要する」状況（C）と判断したが、そうした生徒については小さい声でもいいので発音してみるように励まし、何とかペアで活動できるように支援した。

（４）実践３ 対比表現を意識した内容理解

ア 活動内容

リーディングの指導においては、文章の中でポイントとなる語句や文に注意して文章を読み、その概要や要点を把握することができるよう指導する必要がある。本実践で扱う文章は、２つの事物を対比する内容となっているので、対比に関わる語句に注意して読み、文章の概要をつかむことができるようにさせる。

イ 指導手順

< 1 回目 >

- (7) 教科書に取り上げられている「対比」に関連する表現 (on the other hand, in contrast など) を確認させる。
- (イ) 教科書の文章を黙読し、ワークシート<資料3>に読み取った情報を書き込ませる。

<資料3> 生徒が作成したワークシート

対比(p.42) ワークシート : 紅茶・緑茶それぞれについて、まとめてみよう。		
	紅茶 (black tea)	緑茶 (green tea)
飲まれる地域:	Britain	Japan
製造の工程:	the product of a process called fermentation	without fermentation
飲み方:	Many people enjoy black tea with milk and sugar.	green tea is always drunk straight.
おいしい入れ方:	people use boiling hot water.	green tea should not be so hot.
お茶会での作法:	as opposed to the "afternoon" tea in places like Britain, where people get together to enjoy conversation.	Japanese people sit together and drink green tea quietly at a highly formalized tea ceremony.

- (ウ) 4人グループを作り、それぞれがワークシートに書き込んだ内容をグループで共有させる。
- (エ) クラス全体でワークシートに書き込んだ内容を共有させる。その際、盛り込むべき情報を過不足なくするように教師が誘導する。

< 2 回目 >

- (7) 教科書の文章を黙読し、ワークシート<資料4>に読み取った情報を書き込ませる。今回はワークシートはただの白紙で、自分で前回と同様の枠を作成して書き込ませる。

<資料4> 生徒が作成したワークシート

<u>Squid ink</u>	<u>Octopus ink</u>
when preparing pasta dishes.	hard to find one.
sticks to food better.	
help to keep food from going bad.	
it forms a mass in the water which looks like a dark cloud.	blends into the water and makes it difficult for enemies to see things.
has been used for a long time as a medicine in China.	
used for cooking.	

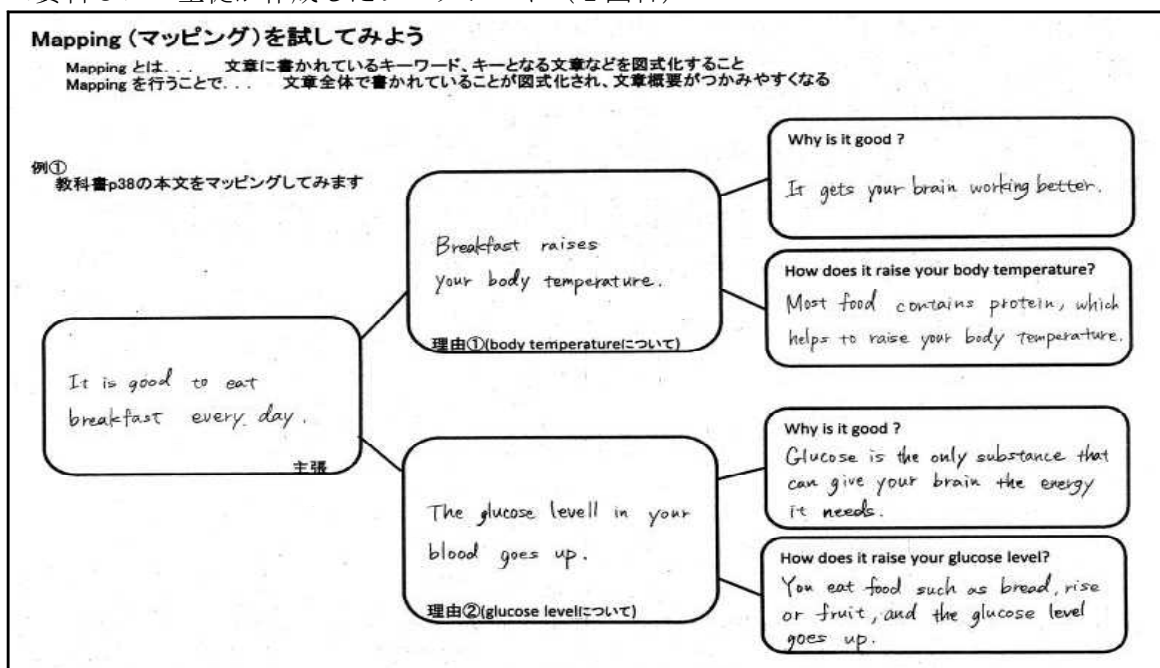
- (イ) 4人グループを作り、それぞれがワークシートに書き込んだ内容をグループで共有させる。
- (ウ) クラス全体でワークシートに書き込んだ内容を共有させる。その際、盛り込むべき情報を過不足なくするように教師が誘導する。

ウ 留意点

< 1 回目 >

教科書に取り上げられている対比表現を確認させた後、生徒にワークシート<資料5>を配布し、2つの事物(紅茶と緑茶)のそれぞれの特徴を対比させながらメモにまとめさせた。直前のレッスンでは「主張とその根拠」に関わる表現が学習事項に取り上げられており、マッピングの手法を用いて文章の概要をメモにまとめる学習を行った。今回の「対比」は、マッピングの一つの形式と捉えることができるので、自分でメモにまとめることに生徒はスムーズに取り組んでいた。

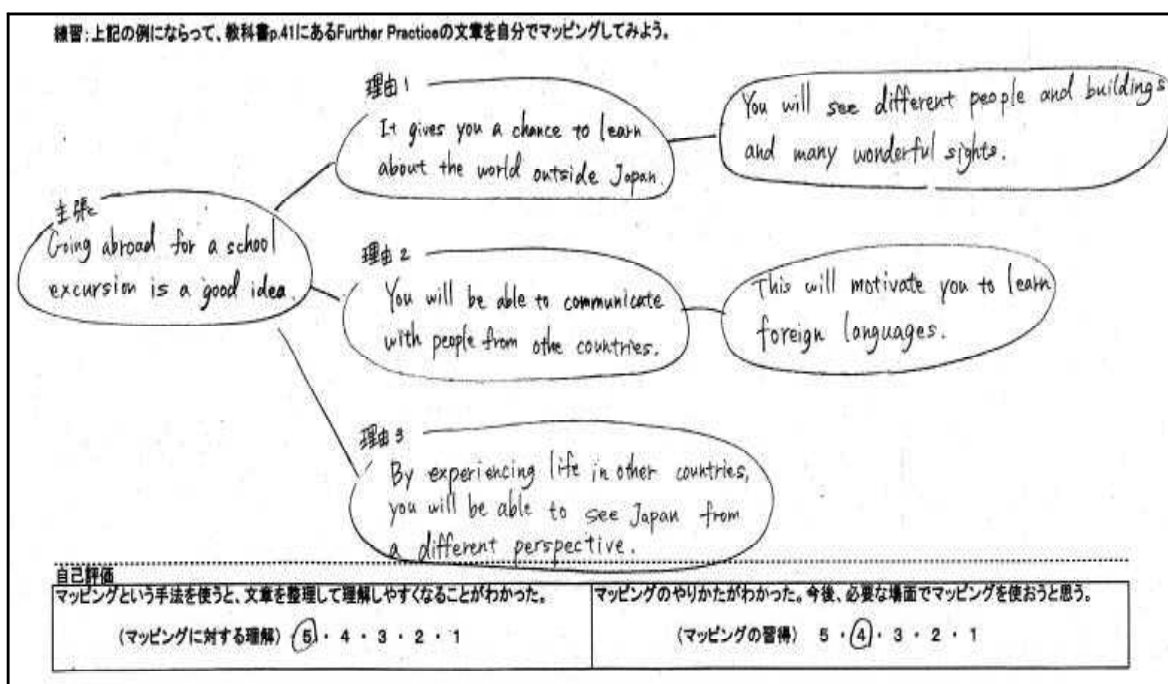
< 資料 5 > 生徒が作成したワークシート (1 回目)



< 2 回目 >

1 回目と同様の方法で学習を進めた。2 回目においては、生徒には全くの白紙<資料6>にメモを取らせた。前回と同じ活動であったため、活動自体はスムーズに取り組んだ。

< 資料 6 > 生徒が作成したもの (2 回目)



エ 評価

本実践では、観察や提出されたワークシートから、評価規準D（言語や文化についての知識・理解）について評価した。

評価規準D：対比を提示する表現の用法を理解している。

↓（生徒の様子）

< 1回目 >

初めは英文の内容をきちんと理解できない生徒もあり、ワークシート内のメモに盛り込むべき情報が不足する者もいた。しかし、その後、グループワークで生徒同士が互いに書いた内容を共有することで、全ての生徒が対比を提示する表現を用いて、的確なメモを作成することができた。また、この活動において読解のねらいが明確だったので、英文から情報を得ようという強い意識をもって読解に取り組むことができた。

< 2回目 >

全くの白紙からメモを作成させたので、生徒が書いたメモは情報が不足しているものが多かった。その後、グループワークで情報を共有すると、生徒は自分では気付かなかったことについて共通理解を図ることができた。

↓（評価）

多少の情報不足はあってもワークシートをまとめることができた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）であると判断した。対比表現の用法を理解し、ワークシートを整然とまとめることができた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。また、ワークシートがほぼ空白の生徒は「努力を要する」状況（C）と判断した。Bに達しなかったのは、本文中の語彙や構文の理解の不足によるものだと推測し、個別に語彙や構文についてヒントを与え、読解に取り組むように支援した。

(5) 実践4 リテリング活動

ア 活動内容

教科書の文章で学習した語句・表現を使用して話したり書いたりすることで、教科書で学んだ内容を他者に伝えることができる。

イ 指導手順

(7) 教科書本文の内容・表現を覚えるために、ワークシート<資料7>を配布し、本文の音読や穴埋め音読（ワークシートの上半分）、リード・アンド・ルックアップの活動をさせる。

(イ) ペアを作る。一方の生徒はワークシートの下半分に記載されているキーワードをもとに、教科書で読んだ内容を相手に伝えさせる。その際、教科書の本文や表現をそのまま使用しても、言い換えたものでも構わない。2分間で、なるべく多くの内容を伝えられるように話させる。もう一方の生徒は、話し手が何語発話したかを聞き取り、語数を記録させる。

(ウ) ペアワークの際、発話をICレコーダーに録音する。後で録音した内容を本人が書き取る。そのメモを見て、不完全な文や表現を意味が通るように書き直させる。<資料8>



図3 授業中の様子

<資料7> 生徒に配布したワークシート

SPEAK OUT! Lesson 9 Squid Ink and Octopus Ink

The squid and the octopus both have ink in their bodies, but only squid ink is used for cooking. It's common, for example, to use squid ink when preparing pasta dishes. But a cook that cooks pasta with squid ink? It would be hard to find one. Why?

First, squid is much cheaper than octopus. Secondly, it is easier to take ink out of a squid than out of an octopus. Third, squid ink sticks to food better. This is useful when you want to add a dark color to the food. Finally, people have traditionally thought that certain medical properties in squid ink help to keep food from going bad. In fact, squid ink has been used for a long time as a medicine in China.

By the way, did you know that the squid and the octopus use their ink defensively against enemies? When the squid releases ink, it forms a mass in the water which looks like a dark cloud. This confuses enemies. On the other hand, rather than forming a mass, octopus ink blends into the water and makes it difficult for enemies to find things.

Now, instead of getting confused about the two kinds of ink, you can see clearly that they are different, both on land and in water.

キーワード:

- ・イカもタコも両方、体の中に墨を持っている。 ・しかしイカ墨だけが料理に使われる。 ・なぜ? ・①イカはタコよりずっと安い。 ・②イカ墨の方がタコ墨より取り出しやすい。 ・③イカ墨は食べ物によくくっつく。食べ物に色を加えるのに便利。 ・最後 人々はイカ墨には医学的な成分があると考えてきた。実際、イカ墨は中国で薬として使われてきた。 ・イカとタコは敵に対して違ったふうに墨を使う。 ・イカ墨は水の中でかたまりを形成する。 ・タコ墨は水の中に混ざる、そして、敵が見えにくくする。

<資料8> 生徒が書き直したもの

SPEAK OUT! 活動2 話した内容を聞いて書き取る

The squid and Octopus have ink in their bodies, but only squid ink is used to make dishes. why? Because there are several kinds of reasons. First, the squid ink is much cheaper than octopus ink. Second, it is easier to take ink out of squid than out of octopus. third, squid ink sticks to food better. Finally, people have traditionally thought about squid ink have medical properties.

○書き取りが終わったら、自分で書き直してみよう

The squid and the octopus have ink in their bodies, but only squid ink is used for cooking. why?

There are several reasons. First, squid ink is much cheaper than octopus ink. Second, it is easy to take ink out of a squid than out of an octopus. Third, squid ink sticks to food better. Finally, people have traditionally thought that squid ink has medical properties.

ウ 留意点

ペアで、発話した語数を相手が聞き取って記録する活動を行わせた。題材となる英文の語彙のレベルにも左右されたが、回を重ねるごとに発話語数は増加した。毎回の語数を記録表に記録したため、生徒は語数を増やそうと意欲をもって活動に取り組んだ。ただし、発話の正確さは問題にしなかったため、意味の通りにくい発話をしている生徒も少なくなかった。生徒自身も相手に内容が伝わるように発話しているのかどうか確認できず、その点が活動に対する意欲を低下させていた。そこで、手順(ウ)の活動も追加して取り入れ、生徒自身が自分の発話を時間をかけて確認したり、教師が生徒の発話に対してフィードバックできるようにした。

エ 評価

本指導では、活動の観察や提出されたワークシートから、評価規準B1（外国語表現の能力）について評価した。

評価規準B1：本文の内容について、メモを見ながらリテリングすることができる。



(生徒の様子)

手順(ウ)の活動を追加したことにより、手順(イ)の際に、生徒の意識は単に学習した単語を並べて多くの言葉を発することよりも、意味が伝わる英語で伝えることに向けられた。そのため、生徒はゆっくり話し、自分の言っていることを確認しながら発話していた。一方で、正確さを意識しすぎて発話をためらう生徒の姿も見られた。また、多くの生徒が自分の声を録音して自分で聞くことに抵抗感をもってしまった。

↓ (評価)

本文の内容について、メモを見ながらでもリテリングすることができた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）であると判断した。できるだけメモを見ないで、相手に内容が伝わるように話していた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。また、リテリングすることができなかった生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、個別に助言を与えて対応した。

この活動を成功させるためには、生徒が題材となる文章の内容をよく理解し、様々な表現をある程度時間をかけて身に付ける必要がある。そして、活動後に生徒ができた部分を認め、励まして意欲を高めていくことが必要である。

(6) 実践5 教科書の文章・学習事項と関連させた英作文

ア 活動内容

文章の中で読解のポイントとなる語句を用いた英文を書くことで、ポイントとなる語句の定着を図る。

イ 指導手順

- (ア) ワークシート＜資料9＞を配布する。日本茶と紅茶どちらか好きな方を選び、選んだ飲み物がもう一方より魅力的であることを主張する文章を書かせる。
- (イ) グループを作り、グループ内で自分の書いた文章を発表し、感想を述べ合う。
- (ウ) ワークシートを提出させ、添削した後に返却する。

ウ 留意点

自分の好きな飲み物、特に教科書で取り上げられた緑茶か紅茶かどちらか好きな方を選ばせて、その理由を述べさせた。過去に扱った教科書の練習問題に、この文章を書く上でモデルとなる文章があったため、それを参考させた。生徒は比較的スムーズに文章作成に取り組むことができた。

＜資料9＞ 生徒が作成したワークシート

対比表現を使って、自分の好きな飲み物を紹介しよう

Write about your favorite drink, comparing two kinds of drinks.

I prefer green tea to black tea.

There are three reasons for this.

First, I am Japanese and I am used to drink green tea.

Second, green tea match a lot of food.

Tastes with sweet or salty.

Finally, green tea contain 「カテキン」.

「カテキン」 is good for your health.

on the other hand, black tea has a little 「カテキン」.

Therefore, I like green tea.

エ 評価

この実践では、グループワークの様子を観察するとともに、提出されたワークシートの内容を添削することで、評価規準B2（外国語表現の能力）について評価した。

評価規準B2：本文で学んだ内容を対比の表現を用いて書くことができる。

↓ (生徒の様子)

観察の結果としては、この実践内容は身近な話題であるため、グループ内で書いた内容を発表し合うとお互いに興味をもって聞くことができた。しかし、ワークシートを添削した結果、約3分の1の生徒が、対比に関する表現の用法（whileは文中で接続詞、on the other handは副詞句として使う等）を正しく理解していなかった。そこでワークシートに書かれた英文を添削してから返却した。返却する際には、共通して多かった間違いを黒板に板書して共通理解を図った。

↓ (評価)

本文で学んだ内容を対比表現を用いて書くことができた生徒を「おおむね満足できる」状況（B）であると判断した。対比表現だけでなく、その他の様々な表現を用いて書くことができた生徒を「十分満足できる」状況（A）と判断した。また、対比表現を用いず、適切な文章を書くことができなかった生徒を「努力を要する」状況（C）と判断し、ワークシートの記述内容を添削するとともに、後日個別指導を行った。

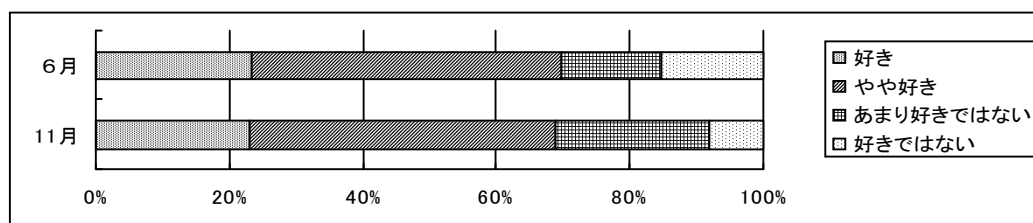
3 検証とまとめ

(1) 事後アンケート（12月に実施）による検証

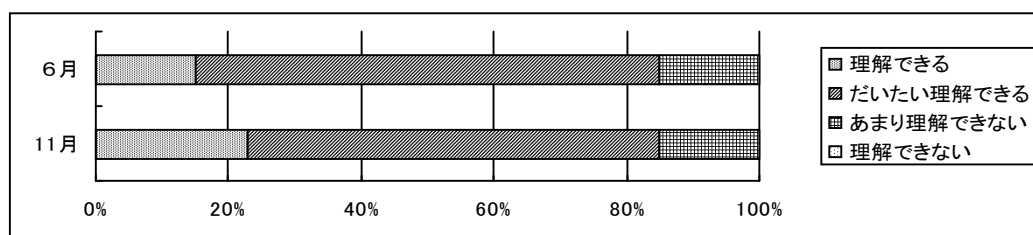
これまでの活動を通して生徒の意識がどのように変化したかを確認するために、事前アンケートと同じ内容で事後アンケートを実施した。

ア アンケート結果

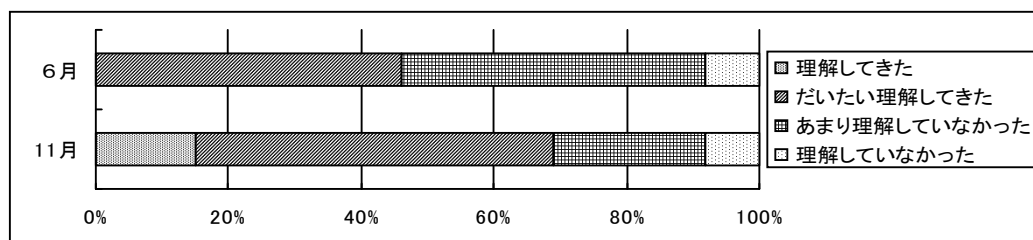
1 あなたは英語が好きですか？



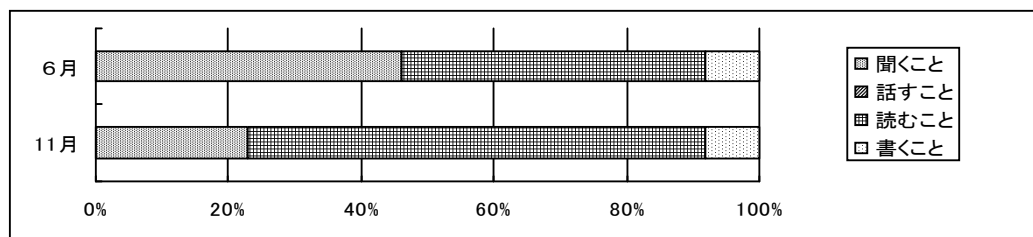
2 あなたは4月から今まで、授業の内容を理解していますか？



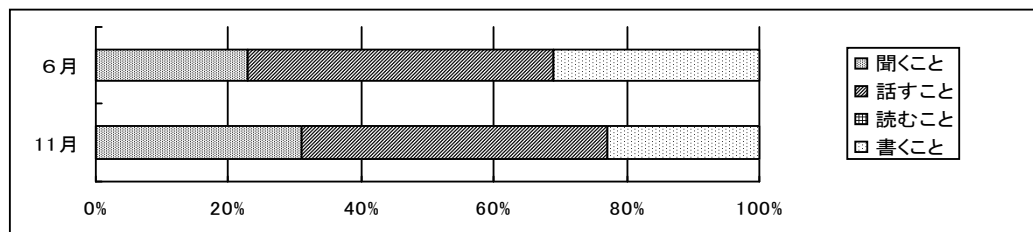
3 あなたはこれまで、その日の授業の目標を理解して授業を受けてきましたか？



4 あなたは英語の4技能の中で、最も得意なことは何ですか？



5 あなたは英語の4技能の中で、最も苦手なことは何ですか？



(2) アンケート分析（6月と12月の比較）

質問1「英語が好きである」と、質問2「授業内容を理解している」の問いに対しては、6月と12月で大きな変化はなかった。質問3「授業のねらいを理解してきたか」では、ねらいを理解している生徒が6月と比較して12月の方が増加した。これは、各授業の最初、また、活動の最初に生徒にねらいを伝えることを意識し、それを実践した結果だと思われる。生徒の4技能のうちの得意なものに関しては、「読むこと」を挙げる生徒が増加した。科目の特性上、「読むこと」に主眼を置いた学習活動が多かったためだろう。一方、不得意なものに関しては、6月と12月で大きな変化はなかった。教師としては、生徒が英語を話す場面を多く設定したので、その活動を通して、「話すこと」に慣れ、苦手な気持ちを少しでも払拭してほしいという思いがあったが、実際はそうならなかった。生徒にとって「話すこと」はかなりの難しさを伴う活動であり、活動を通じて自信を深めるためには、十分な準備を行い、活動に参加することで達成感を得られるようにする配慮が必要であった。

本調査研究を通して、ペアワークに対する意欲・姿勢という点においては向上を見ることができた。級友と協力して活動した経験によって、生徒の気持ちに変化が生まれたのだと思う。繰り返しになるが、活動するにあたって十分に準備をし、活動を通して達成感を得られれば、生徒の能力も伸長し、かつ、意欲も向上するはずだということを強く感じた。また、到達目標に掲げた「読解のためのスキル」や「英語で伝える力」はある程度伸ばすことができた感想を述べる生徒が多かった。本調査研究での取組を通して、指導のねらいとして設定した能力が付いてきたことは、授業中の観察を通して推察できた。

(3) まとめ

本調査研究では科目「リーディング」の授業実践の中で、テーマにあるように指導と評価の工夫を図った。目標に準拠した評価をするためには、評価規準が何よりも不可欠である。学習を通して生徒が最終的にどのような力をどれくらい身に付けてほしいのかを指導を行う前によく考え、そのことを考慮の上で年間の計画であったり、単元の指導計画であったり、各授業の計画を作成する必要がある。さらに、それぞれの評価規準について、目標の達成状況を測るための基準を作成する際には、どのような方法を用いて評価を行うのかを含めて考える必要がある。本調査研究においては、教師による生徒の観察（**全ての実践**）、生徒の発言（**実践1、実践2、実践**

4)、ワークシートに書かれた内容(実践3、実践4、実践5)を、学習状況を知るための評価方法として用いた。評価基準や判断の基準、評価方法をしっかり定めておくことで、各授業での指導のねらいが明確になる。教師は、指導の際、「これは〇〇を伸長させるための指導だ」と意識し、それをこのくらいまでできるようにさせたいと思いながら指導していくことができる。さらに、指導のねらいは、学習のねらいと同義であるため、ねらいを生徒に示すことで、「〇〇をできるようにしたい」という意識が生徒にも芽生え、学習に対する姿勢がより積極的になることも感じた。

事後アンケートの結果からは、生徒自身による自己評価であるが、多くの生徒が到達目標に沿った能力が伸長したことが分かる。しかし、例えば、ペアワークに関して、「以前よりもスムーズに話せるようになったからよかった」という意見もあれば、「(何回か行ったが)なかなかうまくできずに辛かった」という声もあった。指導しながら評価をすることで、生徒の学習状況を把握し、次の学習活動の際の支援や、学習活動内容・方法の改善につなげて、全ての生徒が学習に意欲的に取り組み、成果を上げられるように常に工夫を重ねることが大切であると感じた。

Ⅳ おわりに

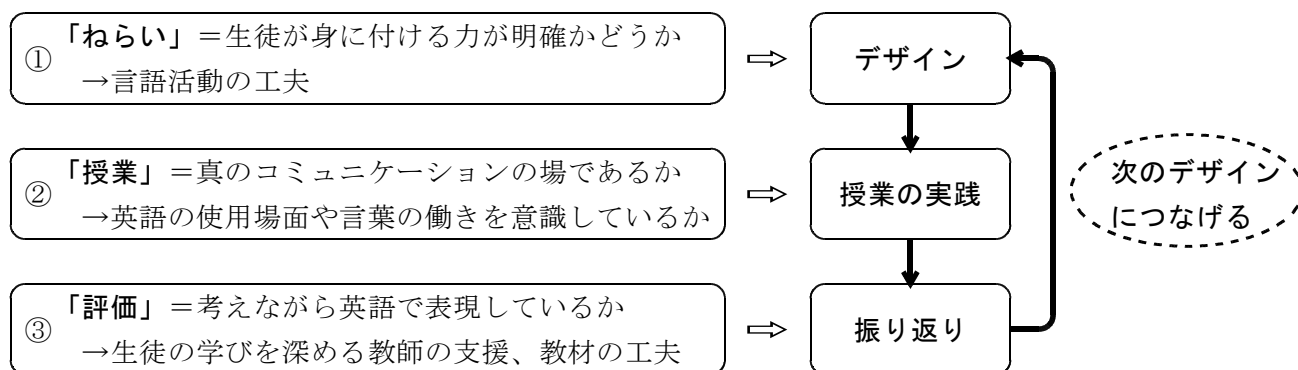
今回の調査研究では、新課程における科目「英語表現Ⅱ」と、旧課程の科目「英語Ⅱ」「リーディング」において、指導と評価の一体化を図るための授業改善の工夫を試みた。各事例とも、平成25年度入学生より学年進行で実施されている学習指導要領に基づき、「授業を英語で行う」ことを基本として言語活動を工夫した授業を実践した。

まず初めに、各事例とも事前アンケートを実施し、生徒が現在抱えている課題について調査した。その結果から、アウトプット活動、特に「話すこと」に苦手意識をもっている生徒が多いということが分かった。詳しくは各事例において分析しているが、その主な原因の一つとして、今までの授業の中で英語を「話す」機会を設けることが少なかったことが挙げられる。

英語の知識をインプットする活動が授業の中心となっていると「話すこと」「書くこと」といった英語で表現する技能を授業の中で伸ばすことは難しい。コミュニケーション能力育成のために言語活動を充実させていく趣旨は、技能の向上を目指したトレーニングを通じて学習意欲を向上させていくことにある。授業の中で活動と学びを両立させていくためには、計画・指導・評価・フィードバックが効果的に組み合わせられる必要がある。外国語科においては、このことが「指導と評価の一体化」を図ることであり、各事例においてその実践をしていただいた。

事例1は、「書くこと」「話すこと」への苦手意識をなくすように、教科書の問題演習だけでなく、生徒が興味をもって授業に参加できるテーマを設定した。**事例2**と**事例3**では、様々な活動を通して、生徒が英語を使用する場面を数多く取り入れた取組を実践した。また、各事例とも、教科書の内容に関連して、国際社会に生きる日本人としての自覚を育むため、日本の文学、歴史、風俗習慣等に関する題材を用いて言語活動を工夫した。教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教える、つまり、教科書をどう利用して、授業に対していかに生徒のモチベーションを高めるかという試みを実践した。これらの事例を参考にしていれば幸いである。また、各学校や生徒の実態に合わせて「指導と評価の一体化」を図った取組を広め、県内全域で英語教育を充実していくことを目指し、今後とも励んでいきたい。

最後に、各事例の成果や課題を振り返り、授業を改善していく上で留意すべきことを述べる。授業で必要なポイントは、いかにして生徒に英語を使わせるかというところにある。よって、教師が授業をする際に考えるべきことは、生徒が英語を使う場面、必然性、素材を吟味することである。そこで、授業をデザインするポイントを以下のように示す。



以上のポイントを踏まえ、各学校において魅力ある授業をデザインしてほしい。本調査研究がその一助となることを願い、結びとする。

◇平成26年度高等学校における教科指導の充実 研究協力委員・研究委員（外国語科）

研究協力委員

栃木県立学悠館高等学校	教 諭	岡 保 宏
栃木県立黒磯高等学校	教 諭	吉 川 知 宏
栃木県立さくら清修高等学校	教 諭	宮 崎 美 香

研究委員

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	宮 田 勇
----------------	------	-------

高等学校における教科指導の充実
外国語科（英語）

外国語科（英語）における指導事例
～指導と評価の一体化を目指して～

発 行

平成27年3月

栃木県総合教育センター 研究調査部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>